深き者

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
深き者

【Ｎコード】
Ｎ２３７７Ｉ

【作者名】
坂田火魯志

【あらすじ】
カナダの西端の地図にも乗っていない村の調査を依頼された本郷と役。その二人が見たものとは。クトゥルフものです。

第一章

深き者

そこはカナダの西の果て、プリンスパートからやや南にある漁村だった。カナダにいる者でもこの漁村のことは殆ど知らない。そこに立ち寄る者も少ない。

しかし今この村に向かう一台の車があった。ようやく雪が消えた道をその白っぽい古ぼけた車がガタゴトと揺れながら進んでいた。

「あのですね」

「どうしたのだ？」

車は日本車の様でハンドルは右だ。その左の席にいる髪を短く刈った黒い皮のジャケットの精悍な顔立ちをした若い男が隣にいる彼よりはやや年長と思われるスーツの上にクリーム色のトレンチコートを着て茶色がかった髪を左右で分けている細面のその男に対して声をかけてきたのだった。

「ここ何処ですか？」

「カナダだ」

茶髪の男はこう彼に返すのだった。この髪の毛を短く刈った若者は本郷忠、トレンチの男は役清明である。彼等は日本の京都で探偵をしている。

その二人が今車の中で揺れている。その中で本郷が役に声をかけてきたのだった。

「それはもう知っていると思うが」

「いえ、カナダなのはわかってますよ」

本郷は何を今更といった口調で役に返すのだった。

「そんなのもう最初からわかっていますよ」

「わかっているのなら聞かなくてもいいが」

「いや、そうじゃなくてですね」

本郷は役に素っ気無くされてもまだ言うのだった。

「カナダの何処に行くんですか？それで」
「村の名前は私も知らない」
本郷は車を運転しながら役の言葉に答えた。
「一体どういった名前なのかな」
「名前も知らないんですか」
「一応名前は聞いたのだがな」
ここで少し難しい顔になる役だった。
「何とかいった」
「何とかですか」
「もっとも村の名前はどうでもいい」
そんなのはどうでもいいというのであった。
「名前はな」
「名前はいいんですか」
「それよりも大切なのは仕事だ」
彼はそちらの方が重要だというのだった。
「仕事だが」
「ああ、何か今回の仕事は妙ですよね」
本郷はシートベルトをしながらも揺れていた。その中で言うのだった。
道の左右は見事なまでに分けられた針葉樹林の森がある。道はでこぼこだらけでそのせいでかなり揺れてしまっているのだ。車は彼等の車の他は何も通ってはいない。実に閑散とした道を進んでいるのだった。見様によってはかなり退屈な風景である。
「カナダ政府からの仕事でしたよね、確か」
「政府からの仕事にしてはな」
「そんな名前なんかどうでもいい村まで行くなんて」
「カナダ政府からの仕事ははじめてだが」
実はそうなのだった。
「そもそもカナダに行くのもな」
「はじめてですよね。アメリカは何度もありますけれどね」

「アメリカはな」
彼等は何度も行ったことがあるのだ。仕事ではあるが。
「あるのだがな」
「アメリカは何か色々な街や村やそれこそ色々ですけれど」
「カナダは森ばかりだな」
「噂には聞いていましたけれど凄いですね」
本郷はその周りを見回しながらまた言った。
「もう何日も森ばかり見ていますよ。あと時々野生動物見るだけで」
「オタワから来たのが間違いだったな」
カナダの首都である。カナダの東の方にある。なお彼等が今向かっているのは西の端の方だ。つまりカナダをほぼ横断してしまっているのだ。
「帰りはシアトルからにするか」
「アメリカのですね」
「あそこなら近い」
役は言った。
「こんな苦労をして先に行かなくて済む」
「全くですよ。これがアメリカなら横断の間結構色々楽しめるんですけれどね」
「カナダはそれはないか」
「これがカナダですか」
結構失礼なことまで言う役だった。
「全く。凄い国ですね」
「ある意味ではな」
やはり二人の言葉には棘があった。どうやら何日も同じ風景ばかり見ていていささかストレスが溜まっているようである。それも無理のないことだった。
「しかし報酬はよかった」
「そりゃ一国の政府ですしね」
金があるのも当然だと。本郷は言うのだった。

第二章

「何かカナダって財政的にはあまりよくないそうですけれど」
「破産していたか」
「どうなんでしょうね。実は俺カナダのことあまりっていうか殆ど知らないんですけれど」
「安心しろ、それは私もだ」
二人共カナダのことは殆ど知らないのだった。それでも仕事を受けているのだ。
「とりあえず広くそのうえ森が多い国だとは聞いていた」
「あと野生動物ですかね」
「とりあえずその位だな」
彼等へのカナダの知識はまさにその程度であった。やはり殆ど知らないのだった。
「だが。それでもだ」
「一人当たり百万ドルですからね」
「二人合わせて日本円に戻して二億円だ」
「しかも移動費やらの諸経費は向こう持ちですし」
「いい仕事と言えるな」
「報酬はそうですね。けれどですね」
しかしここで本郷はまた言うのだった。
「何なんですかね、ただそんな誰も知らないような村を調べろってだけでそんな報酬なんて」
「しかもはるばる日本まで来て私達に頼みに来た」
役はこのことを話した。
「普通はないな」
「俺達はまあ結構おかしな依頼を引き受けていますけれどね」
本郷は自分でこのことを認めてみせた。
「それでも。ただ村を調べるだけでそこまで高い報酬っていうのは」

「まず何かあるな」
役は冷静に分析をしてから述べたのだった。
「というとだ。今回の仕事はだ」
「ええ、あっちの仕事ですね」
ここで本郷の顔が引き締まった。
「間違いなく」
「用意はいいな」
役は相変わらず運転しながら本郷に尋ねてきた。
「あちらの仕事をする為の」
「最初から何かおかしいって思ってましたしっていうか」
本郷もここで言う。
「いつも用意はしていますからね」
「そうだ。それはいい心がけだ」
役は本郷のその言葉を聞いてこう返した。表情は声にすら出してはいない。
「私もだ」
「ああ、やっぱり役さんもですか」
「何時何が出て来るかわからない」
その表情のない声でまた述べた。
「私達の仕事はな」
「そうですよね。今から行く村にしても」
「何かあると思った方がいい」
役は言った。
「間違いなくな」
「でしょうね。何もないと思っていても」
本郷も少しぼやきながらも言うのだった。
「いつも何かありますからね」
「そもそもそうでかればだ」
また言う役だった。
「私達が呼ばれるかというと」

「その時点でまずないですね」
「その通りだ。しかも政府からの話だしな」
「本当に何なんでしょうね」
本郷はここで車の中で首を捻った。
「村の一つに行ってくれって」
「漁村か」
役はその向かう漁村について考えを巡らせた。
「漁村といえば」
「そりゃ海にいる化け物も多いですけれどね」
「そうだな。それこそ河や海ごとにいる」
「さて、何なんでしょうかね」
そんな話をしながら向かうのだった。そうしてそれからさらに時間をかけてやっと辿り着いた村は。彼等が想像していた以上の村だった。
「ええと？」
本郷は車の中からその村を見回して述べた。
「何なんですかね、この村って」
「寂れているな」
「寂れてるってものじゃないですよ」
たまりかねたような声で役に言葉を返した。
「あの、人もまばらですし」
「建物も酷いものだな」
見れば何もかもがだった。寂れ乾いた空気が漂っている。少し見ただけで寒いものがあり僅かに見る村人も背中を屈め陰気な感じだった。

第三章

磯の匂いが車の中にも漂う。しかしだった。その匂いも何か寂しいもので。どうにもならない寂しい暗さがそこには強くあった。
「ここって一体」
「寒村と言うべきだが」
一応こう言う役だった。彼は相変わらず車のハンドルを握り続けている。
「しかしここは」
「何ていいますかね」
「今にも誰もいなくなってしまいそうな村だな」
役は首を傾げさせて述べた。
「そして何もなくなってしまってな」
「ですよね。こんな村に何があるんでしょうか」
「それはこれからわかることだ」
役は今はこう言うだけに留めた。
「今からな」
「じゃあとりあえずは車を止めますか」
「停める場所はあるか」
「それも見つけないといけないんですかね」
本郷もまたここで首を傾げさせることになったのだった。
「若しかして」
「あの、駐車場すらない村ですか」
「カナダにはそういう村もあるんだろうな」
この辺りは役もよく知らないことだった。何しろ彼にしてもカナダについて知っているかというとはじめてだから実感として何も知らないのである。
「よくわからないが」
「そりゃそうした村はアメリカにもありますけれどね」

本郷はアメリカになぞらえて考えてみた。
「けれど。ここまで寂れた村だとちょっと」
「とにかく何処かに停めよう」
結論としてはとにかくそれしかないのだった。何時までも車の中にいるわけにはいかない。それで何かを調べられるかというと無理だからだ。
「とりあえずはな」
「ですね。まずはそこからですね」
こう話してから車で村を回る。どの民家も寂れて開いている店は殆どない。海辺の港にある舟も今にも朽ち果てようとしているものばかりだ。村全体が廃墟と言っても差し支えのない程であった。
「あの、ここって」
「人も少ないなんてものじゃないしな」
「役場とかないんですかね」
「どうかな」
役は本郷の今の言葉にも首を捻った。
「ないのかもな」
「それだけ小さな村ってことですか？」
「カナダではこんなこともあるのかも知れないな」
またカナダだからだというのだった。車をゆっくりと動かしながら。
「若しかしてな」
「そうですか。若しかしてですか」
「広い国だ。幾つかの村を一まとめにしてな」
「それで一つの行政単位にしているんですかね」
「そうかも知れない。若しかしたら」
「若しかしたら？」
「教会もない可能性がある」
このことについても言う役だった。
「若しかしたらな」

「教会もですか」
「ここまで何もないとそう思えてくる」
役はまた言った。
「流石にそれはないと思うがな」
「そうですよね。カナダもキリスト教徒の国ですし」
ならば、ということだった。キリスト教国ならばそれこそどんな小さな村でもそこに人がいれば教会がある。そこまでキリスト教が浸透しているということなのだ。
「だったらやっぱり」
「とは思うが。しかし」
「ないですね」
本郷は大きな溜息を吐き出した。
「何一つとして。いや、本当に」
「どうしたものか」
役もここでまた首を傾げさせてしまった。
「探してもないとなると」
「あっ、あそこに」
ここで気付いたのだった。人がいたことに。そこにいたのは背の丸い、それでいて不気味に太った老人だった。頭は前から禿げ上がり目が大きく出ている。そして口がやけに尖り汚らしい腹が出ている。そんな老人だった。

第四章

「人がいますし」
「んっ！？」
役はその人を見てすぐに目を顰めさせた。
「あの人だが」
「何かあったんですか？」
「さっきも見なかったか？」
こう言うのである。
「まさかと思うが」
「そうですか？」
だが本郷はそれを言われてもあまり記憶にない感じだった。
「見ましたかね」
「村に入った時にいたような気がするがな」
「そういえば何かああいう感じの人いましたよね」
本郷も彼の言葉から村に入った時に見たその背筋の丸い村人を思い出した。思い出してみるとその村人も今目の前にいる老人と同じように目は大きく出ていてしかも口も尖ったように飛び出している。そして妙に太っていた。このことを思い出したのである。
「けれどあの人って」
「何だ？」
「確か女の人ですよ」
こう言うのである。
「確か」
「そうか。女の人だったか」
「ええ。だから違いますよ」
本郷はまた役に告げた。
「流石に性別は違いますからね」
「そうか。なら違うな」

役もここまで話を聞いてやっと頷いたのだった。
「それならな」
「そうですよ。まあとにかくですね」
「話を聞くか」
「何につけてもですね」
それだという本郷だった。
「さもないと話にも何にもなりませんからね」
「その通りだな。まず誰かに話を聞く」
役もここで遂に本郷の言葉に完全に頷いた。
「それだな」
「はい。じゃあそういうことで」
「行くぞ」
とりあえず車から出てキーをしてそれから出るのだった。そのうえでその年老いた太った男に声をかけに歩み寄るのであった。
「あの」
「いいでしょうか」
まずは穏やかにこう声をかける。
「この村のことですが」
「何て名前の村ですか」
「ん！？」
老人はその言葉を聞くとまず顔を彼等に向けてきた。見ればその顔は横から見てもわかるようにやはり大きく前に出ていた。そのうえ唇がやたらと厚く歯も尖っているように見えた。そのある種異様な、人間離れした顔を二人に見せてきたのであった。
「あんた達は」
「ああ、俺達日本人ですけれど」
本郷がこう老人に対して答えた。
「日本って国は御存知でしょうか」
「海の向こうの国です」
役もまた説明する。

「そこにある国ですが」
「知らない」
老人は二人のそれよりもまだたどたどしい英語で返してきた。
「そんな国は」
「あっ、そうですか知らないですか」
それを言われても特に驚いたものは見せない本郷であった。外国にいればこうしたこともわりかしあることであるからだ。同じ様に広く日本を知らない人もやはりいるのだ。
「じゃあそれはそういうことで」
「それでですが」
彼と入れ替わる形で役が老人に問うてきた。
「この村の名前は」
「ない」
今度はこんな返答だった。
「名前はない」
「ない！？」
「村に名前がないんですか」
「そんなものは必要ない」
老人はやはりたどたどしい英語であった。そのたどたどしさは何かが無理をして人の言葉を出しているような、そうしたたどたどしさであった。

第五章

「この村には」
「必要ないって」
「それは何故」
「言う必要も無い」
ここで二人から顔を背ける老人であった。
「それだけだ」
「えっ、ちょっと」
「待って下さい」
しかし老人は二人の呼び止めには従わなかった。そのまま何か足全体をべたりとつけるような歩き方で前に進み二人の前から去った。そうして老人は姿を消してしまったのだった。
「何ていいますかね」
老人が姿を消してからたまりかねたようにして言葉を出す本郷であった。
「あまりにもぶしつけですよね」
「妙だな」
役は首を捻ってこう述べたのだった。
「あまりにもな」
「おかしな爺さんでしたよね」
「そうだな。態度といい」
「顔立ちもおかしかったですよね」
本郷は老人のその顔のことも語るのだった。
「何か」
「声の出し方もな。何か無理をして話しているような感じがしたな」
「それに歩き方も」
二人は老人の実に細かい場所まで見ていた。何処までも見ていたのである。

「何か普通の人間と違って異様に重心が低くて手の振り方も殆ど無くて」
「足を全て地に着けてな」
「それでやけに首を前に出していません？」
「背筋も曲がっていた。ああした歩き方は見たことがない」
「ええ。何なんですかね」
あらためて言う本郷であった。
「あれは」
「わからない。ただ」
「ただ？」
「あの老人からはこの村に関する情報は得られなかった」
このことを言うのだった。
「今のところはな」
「今のところはですか」
「後はわからない」
こうも言った。
「だが今はだ。他の人を探すとしますか」
「そうですね。それにしても」
本郷はここでまた周囲を見回した。だが見回したその視界には誰もいなかった。見事なまでに寂れた建物の他は何も見えなかった。
「本当に何もない村ですよね」
「全くだ。これでは情報を得ようにもな」
「図書館ありますかね」
本郷がここで言ったのは図書館だった。
「それがあったら郷土史とか調べられますけれど」
「どうかな。あればいいがな」
「今度はそれを探してみますか」
こう言うのであった。
「そうしますか？」
「そうするか。聞く人もいなければ」

「折角聞いた人もあんなんだったら」
「本で調べるしかない」
結論は実に簡単に導き出された。電卓を使ったよりも簡単にであった。
「だからだな」
「ええ。それじゃあまた車に乗りますか」
「そうするか」
「今度は俺が運転しますよ」
さりげなくこう言う本郷だった。
「役さんもずっと運転していましたしね」
「いいのか？それで」
「いいですよ。たまには休まないと」
彼のささやかな優しさだった。それを今ここで出したのである。
「ですから」
「わかった。それではな」
「はい」
こうして二人は今度は本郷の運転で村の周りを見て回った。今度は人は誰も見なかった。人どころか犬も猫も鳥さえもいない。見事なまでに何もおらず寂れきった建物と乾いた潮風、それにその風に吹かれて舞うゴミと埃だけがある。他には何もない村を見て回った。

第六章

しかしやはり何もなかった。図書館もなければ村役場もだ。そういったものも何一つとしてなかった。そして二人が何とか見つけたものは。

「これだけですね」

「そうだな。これだけだ」

二人は今教会の前にいた。小さくやけに古ぼけた教会だ。黒い今にも崩れ落ちてしまいそうな屋根の上にこれまたたった今折れてしまいそうな白い十字架が掲げられている。その古ぼけた教会の前に車を停めてそのうえで二人並んで立っているのであった。

「教会はありましたね」

「流石にな」

こう本郷に返す役だった。その古ぼけた扉を見ながら。

「教会はあったか」

「けれどかなり古いですね」

「この村ではこれも当然か」

役は今もその扉を見ながら言うのだった。

「古いのはな」

「中に神父さんか牧師さんいますかね」

「普通はいるがな」

「まあそうなんですけれどね」

教会に神父か牧師がいるのは当然のことだった。しかし今の二人はそのことすら疑っていたのであった。それだけこの村が寂れているからだ。

「とりあえず中に入りますか」

「そうだな」

本郷の言葉に頷くとだった。そのまま前に出る。そうして扉を開けるとだった。

中もまた実に酷いものだった。席も全て古ぼけていて触っただけで崩れてしまいそうだった。礼拝堂もまた掃除こそされているがそこも今まさに崩れてしまいそうだった。十字架もそこにある主もそこにあるのが奇跡なまでに朽ちている有様であった。

教会の中には誰もいない。本郷はその朽ち果てようとしている中を見たうえで役に顔を向けてそのうえで彼に対して問うた。

「どう思います？これは」

「誰もいないか」

こう述べた役だった。

「やはりここは」

「帰りますか？やっぱり」

「そうだな。それで今回はだ」

「もう車を拠点にして調べていきますか」

「そうするしかないようだな」

そんな話をした。だがここで。その教会の奥から一人の小柄な黒い服の男が出て来たのであった。

「おや、これは珍しい」

「あれ、いましたね」

「神父さんですか？」

「いえ、私は牧師です」

こう答えるその黒い服の男だった。見ればその黒い服は法衣であり首には十字架がかけられている。髪は白く丁寧に後ろに撫で付けている。顔は穏やかであり深い皺こそあるが全体として気品を感じさせる落ち着いた顔であった。黒い目の光も優しいものである。

「この教会の」

「そうでしたか。牧師さんでしたか」

「それはまた」

「ふむ。東洋人の方ですか」

その牧師は二人の姿を見て今度はこう述べた。ゆっくりとした足取りであるがもう二人の前に出て来ていたのだった。

「見たところ」
「はい、日本から来ました」
「海の向かい側の国からです」
「そうですか。日本からですか」
牧師は彼の言葉を聞いて何度も頷くのだった。
「それは遠いところからよく」
「はい。一旦オタワに着きまして」
「そこからここまで」
「オタワからとは」
今の二人の言葉にこれまで以上に驚いた顔になった牧師だった。
小柄なので二人の顔を見上げている。そのうえでの言葉であった。
「また遠かったでしょう」
「何日もかかりましたよ」
「車で来ました」
「車でしたら教会の側に止めておいて下さい」
車のことはこれで終わった。
「脇の方にスペースがありまして」
「そうですか。それでは」
「後でそちらに移しておきます」
「はい。それでです」
牧師は二人にさらに問うのだった。
「貴方達はどうして日本からこちらに」
「はい。ちょっと旅行で」
「それでこちらまで」
こう言って誤魔化すのだった。とりあえずそういうことにしたのである。

第七章

「来ましたけれど」
「また随分と変わった村ですね」
「変わっているどころではありません」
ここで牧師の表情が変わった。暗く不吉なものを感じさせる顔であった。
「この村は」
「変わっているどころではないとは」
「どういうことでしょうか」
「まずこの村は普通の地図には載っていません」
最初にこう話すのだった。
「そして周囲の村や町からこの村に入る人もいません」
「それはまたどうしてですか？」
「どうして誰も」
「それはこの村があまりにも異様だからです」
だからだというのである。
「この村はもう回られましたか」
「まあ車で」
「少しは」
「家はどれも寂れきっていて開く気配もない」
次にこのことを話した。どの家もまるで中に人がいない廃家の様に酷い外見である。閉じられた扉は開く気配すらないがその朽ちた様は惨いまでであった。
「店も開いたものは一つもなく」
「ですよね」
「本当に一つもなく」
「何もない村です」
あらためて二人に話した言葉である。

「昼に出歩く人すら稀です」
「ですよね。二人だけ会いましたけれど」
「その人達もつれない態度でした」
「あまりにも余所者に対して排他的で」
それもあるのであった。
「何もかもを拒む風潮があります」
「それがまた極端みたいですね」
「ここまで排他的な村はそうは」
「しかもです。村の者に御会いされたのですね」
牧師の顔はさらに暗いものになる。声も無意識のうちか怪訝なものになっている。その声で二人に対して語るのであった。
「二人程」
「ええ、二人だけです」
「今申し上げた通りです」
「では。御覧になられましたね」
牧師の顔はさらに暗く声が怪訝なものになっていた。
「村の人を」
「ええと。まあ偶然ですけれど」
「体型が」
「そうです。全く同じなのです」
牧師の声はさらに小さいものになっていた。
「男も女も禿げ上がり顔は前に突き出て目は不気味に大きく」
「ええ、それで」
「唇が厚く口が尖ってますね」
「首筋も何かヒダになっているのです。それに手も何か指と指の間が短く」
「あっ、それは気付きませんでした」
「しかしその姿は」
役は話を聞いているうちにあることを思い出したのだった。
「まさか」

「んっ！？そういえば」
ここで本郷も気付いたのだった。
「この姿って」
「君も気付いたな」
「ええ。あれですよ」
本郷もまた言うのだった。その目を鋭くさせて。
「その姿は」
「あの連中の話は聞いていたが」
役はここでまた言った。
「まだ生き残っていたのだろうか」
「確信するのはまだ早いでしょうね」
「そうだな。確か古の時代に滅んだ筈だからな」
「ええ、そう聞いていますからね」
「あの」
ここで牧師が二人に対して問うてきたのであった。
「一体何のお話をされているのでしょうか」
「えっ！？ああ」
「少し」
「日本語で話されておられますね」
先程は二人だけの会話だったので日本語であった。しかし牧師に対しては英語で話すのだった。

第八章

「今は」
「はい、そうです」
「日本語です」
「何のお話をされているのでしょうか」
怪訝な顔で二人に問うのだった。
「それで」
「何でもありません」
「そういうことで御願いします」
「はあ。それでは深く詮索しないことにします」
今は牧師は彼等の会話を詮索しなかった。あえてそれ以上はだった。この辺りに牧師としての心遣いを見せていると言えた。
「そういうことで」
「はい、それでは」
「それで御願いします」
「ですが宿ですが」
ここで牧師はこのことを言うのだった。
「この村にはホテルといったものはありません」
「それなら車の中で寝ますから」
「それで」
「いえ、そういうわけにもいかないでしょう」
しかしここで牧師は二人に対してこう告げるのであった。
「宜しければですが」
「はい」
「何か」
「ここでお休みになられてはどうでしょうか」
二人への提案であった。
「雨露も凌げますし粗末ですが食事もありますし」

「ですがそれは」
「いいのですか？」
「はい、どうぞ」
穏やかな笑みと共にまた告げたのだった。
「それに私もです」
「牧師さんもですか」
「この村に一人で赴任してそれからずっとここにいるのです」
こう二人に話した。寂しい笑みになって。
「村の人達は教会には立ち寄りませんし」
「そうですか。やっぱり」
「教会には」
「本当に誰もなのです」
今の二人の言葉の意味には気付かずさらに話す牧師だった。
「誰も来ないので。あまりにも寂しくて」
「ええ、わかりました」
「そういうことでしたら」
「話し相手になって下さい」
このことを申し出たのだった。
「是非」
「それでは御願いします」
「私達で宜しければ」
こうして二人はこの牧師がいる古ぼけた教会に宿を借りることになった。その日の夕食は固いパンに安物のワイン、それと古いチーズだけだった。それだけの質素な夕食を採るのであった。
薄暗い頑丈さだけが取り柄の木の椅子とテーブルだけがある部屋の中で三人は顔を寄せ合ってその質素な夕食を食べている。その中で話すのだった。
「それじゃあこの村は」
「変わらないのですね」
「はい」

牧師はこう二人に話すのであった。
「この村に来てもう三年になりますが」
「では三年もこのままですか」
役はワインを小さなガラスのコップに入れながら牧師の話を聞いていた。
「三年もこの有様のまま」
「何も変わらないのです」
牧師はまた話した。
「本当に何一つとして」
「どうやって生計を立ててるんでしょうね」
本郷はわざといぶかしむ顔を作って英語で呟いてみせた。
「この村は」
「さて」
牧師は今の本郷の言葉に首を横に振るだけだった。空しそうな仕草で。
「それすらもわからないのです」
「そうなのですか」
「御覧の有様で店は全て閉まっています」
これは二人が既に見てきた通りであった。

第九章

「それに観光もありませんし」
「ホテルさえありませんしね」
本郷はパンを食べながら応えた。とりあえず量だけはあったのでそれで満足できた。彼はとりあえず食べられれば満足することもできるのだ。
「それで観光なんて」
「そして産業ですが」
「工場も農場もありませんね」
「漁業だけですが」
役に応えるその言葉もくぐもったものであった。
「おわかりでしょう、おそらく」
「ああ、あの波止場に舟や」
「それも望めませんね」
「村として成り立たないとしか思えません」
牧師はここで言うのであった。
「私は週に一度車で最寄の村の教会から食料やそういったものを分けてもらってそれで何とかやっていっております」
「村人はですね」
「わからないと」
「そうです」
こう二人にまた述べたのであった。
「果たしてどのようにして」
「ああ、それで気になったことですが」
本郷はここでまた牧師に対して尋ねた。
「いいでしょうか」
「はい、何でしょうか」
「ここの村人達のことですけれど」

彼が尋ねるのはこのことであった。
「あの容姿は誰もがなのでしょうか」
「容姿ですね」
「はい」
「あの独特の容姿のことですか」
牧師もそのことをわかっているようであった。言葉にも実際にそれが出ていた。
「あれはですね」
「ええ。あれは」
「奇怪なことに誰もがなのです」
「やっぱりそうでしたね」
「そうだな」
今の牧師の言葉を聞いて日本語で言い合う二人であった。話を聞いてここで一つのことに確信が持てたのであった。特に役はそうであった。
「これで一つ大きな証拠が出たな」
「そうですね」
「それでですが」
牧師は日本語で話し合う二人に英語で語り掛けてきた。どちらかというとケベック訛りを思わせるその英語でだ。
「ここの村の人達は昼は滅多に出ずに」
「はい」
「私は夜はいつも早く休むのですが」
こう前置きしての言葉である。
「何故かと申し上げますと」
「朝のミサの為ですね」
「はい、それです」
まさにそれだと。役の問いに対して答えたのであった。
「その為夜は早くに休むのですが」
「そうですね。では夜の世界のことは」

「殆ど知りません。ですが」
それでも彼は二人に話すのであった。
「どうやら村の人達は夜動いているようなのです」
「夜ですか」
「真夜中に時折話し声や歩く音が聞こえます」
こう二人に対して話したのであった。
「それで時々目が覚めてしまうのです」
「そうですか。夜にですか」
「わかりました」
二人はその話を聞いてまた頷いたのであった。
「夜にですね」
「普通は有り得ませんね」
「まさか夜に漁業をしているのでしょうか」
こうしたことも一応考えてみるといった感じの牧師であった。しかしその顔は明らかに半信半疑、いや殆ど疑っている、そんな顔であった。
「確かに明けないうちに出て明け方に漁をするものですが」
「真夜中に漁をする場合もありますけれどね」
「魚ややり方によっては」
このことは一応話す二人であった。
「ですが。あの波止場と舟じゃとても」
「『普通の』漁は無理です」
役はここであえて普通、という英語の部分を強調して述べた。横で聞いている本郷はその強調の意味がわかったが牧師にはわからなかった。それをただ聞いているだけであった。

第十章

「そうですね。無理ですよね」
「はい、無理です」
牧師は気付かなかったがそれはいいとして話を続ける役であった。
「間違いなく」
「では一体何をしているのでしょうか」
牧師にはどうしてもわからないことであった。首を捻るばかりであった。
「この村の人達は」
「『人達』ですね」
今度は本郷が強調するのであった。
「そうですね。『人達』ならいいんですが」
彼もまた英語で人達、という部分を強調してみせたのであった。
「本当に」
「ですね。確かに」
やはりこの言葉の意味に気付かない牧師であった。普通の世界に住んでいる彼にはどうしても気付かないことなのであった。
「どうやって生活しておられるのか」
「謎ですね。じゃあ食べ物もワインもなくなりましたし」
「はい」
気付けば今晩の分のパンもチーズもワインもなくなっていた。それで夕食は終わりであった。
「それでは」
「ではまた明日の朝に」
「朝はミルクとザワークラフトがあります」
牧師はメニューについて語ったのだった。
「それとやはりパンです」
「朝はミルクですか」

「それとザワークラフトを欠かさないようにしています」
それもだというのである。
「身体にいいですから」
「そうですね。ザワークラフトはいいものです」
役も牧師のその言葉に賛成して頷くのであった。
「それで野菜は足りますし」
「それと昼はジャガイモと林檎があります」
ついでに昼のことも話す牧師であった。
「ジャガイモは茹でてそして林檎はです」
「肉はないんですか？」
本郷はふとこのことが気になって牧師に尋ねたのであった。今まで話したところでは肉類は影も形も出ていないからだ。そのことから彼はこの牧師についてあることを思ったのであった。
「そうした宗派なのですか？」
「いえ、ただ肉や魚は好きではないので」
だからだという牧師であった。
「それでなのです」
「ああ、嗜好からですね」
これで事情がわかった本郷であった。
「それでですか」
「はい。水は井戸があります」
それだというのである。
「お風呂はそれとサウナがあります」
「サウナがですか」
役はそのサウナという言葉に反応したのだった。
「サウナもあるのですか」
「以前からこの教会にあったものでして」
こう説明する牧師であった。
「ただ。普段は殆ど使いません」
「どうしてですか？」

「お風呂は毎日入るようにして洗濯も欠かしませんが」
どうも中々清潔な牧師のようである。本郷の問いに答えるのであった。
「一人でいますのでサウナはそうは使わないようにしているのです」
「だからですか」
「はい。薪はふんだんにありますし」
この辺りは実にカナダらしい言葉であった。カナダといえば森の国である。この村にしろ少し歩けばもうそこには薪の材料となる木が嫌になる程あるのが村に入る時に見えていたのである。
「それを使いまして」
「お湯を沸かしてですね」
「この村にはガスも水道もありませんし」
これは二人もおおよそ察しがつくことだった。地図にも載っていない、そして殆どの者が知らないようなこんな村にそうしたものが通っていると思う方が不自然であった。カナダは実に広くそうした村も存在するのである。この時代でも。
「ですから薪を」
「大変ですね」
本郷は牧師の話を聞いて素直に自分の言葉を出した。
「薪っていうのは」
「いえ、カナダでは普通ですよ」
しかし牧師は笑ってこう返すのだった。
「カナダでは至って普通です」
「今でも薪が普通ですか」
「人里離れている家も多いですし」
だからだというのである。
「それでそうした家も多いのです」
「そうなのですか」
「はい。だからです」
また話す牧師だった。

「それで私も慣れていますからどうとも思っていません」
「日本でもまだそうした薪を使う家はありますが」
役が言うのだった。

第十一章

「ですがかなり少なくなっているのは事実です」
「日本の方が進んでいるのかも知れませんね、そういうところは」
「全てにおいてそうとは言えないと思います」
ここでこう返す役だった。
「それは別に」
「そうですか。別にですか」
「はい。では薪のことですが」
また話す役だった。こう牧師に言うのであった。
「私達の方で切って来ましょうか」
「薪をですか！？」
「はい、明日の昼にでも」
「それでどうですかね」
役だけでなく本郷も話に加わってきたのであった。
「私達はまだ若いですし」
「それに力もあります」
二人は牧師に対して提案する。
「それでどうですかね」
「よければ」
「とはいいましても」
だが牧師は二人のその提案に難しい顔を見せるのであった。
「今はじめて御会いした人に対してその様なことを御願いするのも」
「いえ、いいですから」
「私もです」
それでもまだ言う二人であった。
「このままここにいらしてもらうのも何ですし」
「御願いできるでしょうか」
「教会に来た神の羊達は全て温かく包む」

神の僕らしい言葉であった。
「ですからその様なお気遣いは」
「御心配なく」
「ただの好意と思って下さい」
渋る牧師に対してまた話した。
「ですからどうか」
「やらせて下さい」
「そこまで仰るならです」
ここで牧師も遂に頷いたのであった。二人の好意を受け入れたのである。
「宜しく御願いします」
「はい、それじゃあ」
「明日のお昼に」
「三人で参りましょう」
牧師は穏やかな笑みで二人に応えた。
「それで宜しいですね」
「ええ、では」
「今日はこれで」
「お風呂があります」
牧師は最後に言った。
「入ってそれでお休み下さい」
「あっ、すいません」
「御好意有り難く受けさせて頂きます」
こうして二人は牧師の好意の風呂も受けそのうえで彼が用意したそれぞれのベッドに入った。そうしてそのうえで休んだかというと。それは違っていた。
真夜中になるとだった。二人はすぐにベッドを出て。静かに教会の外にも出るのだった。青い冷たい夜空の上に白い満月が輝いていた。
その満月の輝きを見上げながら。本郷は役に対して言うのだった。

「話を聞いていますと」
「そうだな」
本郷のその言葉に対して頷く役だった。
「ここの村人達はどう考えてもな」
「普通の人間じゃありませんね」
この結論は今はっきりと出ていた。
「まずね」
「昼に動かないとなると」
「夜ですけれどね」
「だが。おかしい」
役は周囲を見回しながら述べた。
「本郷君、誰かの気配は感じるか」
「いいえ」
役の言葉に首を横に振った。
「何も感じませんね」
「これを使うか」
言いながら懐から札を出した。数枚の白い札であった。

第十二章

「ここはな」
「式神ですか」
「いつものことだがな」
その数枚の札を見ながらの言葉だった。
「これを使う」
「それで村の中を見回してみますか」
「村だけでなくそれぞれの家の中もな」
そうした場所も見るというのである。
「見回してみる」
「それじゃあそれで御願いします」
本郷は役に対してそれでいいと返した。
「何かを知らないと何もなりませんからね」
「その為にも式神は使える」
また言う役だった。
「それではだ。ここでもだ」
「ええ。御願いします」
本郷の言葉を受けてそのうえで札を投げた。するとその数枚の札はすぐに白い蝙蝠達になった。彼等は壁をもすり抜けそのうえで村中を見て回るのだった。
蝙蝠達を飛ばせながら役は。その目に怪訝な色を浮かべて述べた。
「妙だな」
「何かありました？」
「何もない」
あったのではなくないというのである。
「何もだ。ない」
「ないんですか」
「そうだ。村の中にも家の中にも何もない」

こう本郷に述べた。教会の前に立ったまま。
「何もな」
「っていうと誰もですか」
「当然人もいない」
役は言いながらその目をいぶかしむものにもさせていた。そうしてそのうえで本郷に対して問うのであった。
「これについてどう思うか」
「異様ですね」
今の役の問いに対する本郷の返答はこうしたものであった。彼もまた話を聞いていてその目をいぶかしむものにさせていた。そのうえでの返答だった。
「それはまた」
「確かに村人は存在しているが」
「ええ」
「しかし誰も見当たらない」
「村の何処にも。そして家の中にもですね」
「何処にも誰もいない。何故だ」
「答えはですね」
彼の言葉を聞いてまた答えを出してみせた本郷だった。頭の回転の早い彼らしく答えはすぐに返って来たのであった。
「一つだけですね」
「他の場所に行ったな」
「それしかないでしょう。そこにいなければ別の場所にいる」
彼はこう言うのだった。
「それしかありませんから」
「では何処にいるかだ」
役が次に問題として出したのはこのことだった。すの何処にも見当たらない村人達は今何処にいるのか、そのことを問題として出してみせたのだった。
「彼等は一体今何処に」

「あの姿形って言えば普通は偏見になりますが」
本郷は一旦こう前置きはした。しかしそれでも言うことは言うのであった。
「一つしかないでしょうね、やっぱり」
「海か」
「ええ。そこしかないと思いますよ」
実際に海の方を見ての言葉である。海は白く大きな満月に照らし出されその中で波を輝かせその月も鏡合わせに映し出している。彼は今その海を見て言葉を出していた。
「やっぱりね」
「そうだな。私もそこしかないと思っている」
それについては役も本郷と同意見であった。そうしてここで彼もまたその海を見るのであった。
「あの海しかな」
「いますかね、やっぱり」
「あの姿形ならばな。いるだろうな」
「ですね。それで海の何処にいるかですけれど」
「海底か」
役はここで海底だと断定してみせたのだった。
「若しくは海中奥深くかだが」
「自分で乗り込むにはちょっと止めた方がいい場所みたいですね」
「それは絶対に止めておくべきだ」
「ええ、言ってみただけです」
それはこれで留める本郷であった。彼にしてもそうすればどうなるかはよくわかっているのだった。

第十三章

「空で鳥と戦うようなものですからね」
「少なくとも今の私達がそのまま行っても碌に調べられずに敗れるだけだ」
「死んだら元も子もないと」
「だからそれは論外だ」
結論としてこう語られたのであった。役のその言葉から。
「しかもだ。舟もだ」
「御丁寧に一隻も出ていませんね」
今度は波止場を見た。見れば確かに舟は一隻も出てはいない。どのみち今にも朽ちようとしている舟達だがどれも出ていないのであった。
「見事なまでに」
「ということはだ。彼等は海にいるとしてもだ」
「完全に人間としての手段で入ってはいない」
「答えが出たな」
役は冷静に述べたのだった。まるで全てを見透かしたかの様に。
「彼等は間違いなく夜に動く」
「ええ」
「そして海にいる」
このことも断定できることだった。何故ならこの村にあるものはその古ぼけた漁港しかない。他にあるものは何もないからである。
「それも人間の使う手段で海に入ってはいない」
「やっぱりそこまで考えますとこの村の連中は」
本郷の言葉は何時の間にか彼等を人間とみなしていないものになっていた。そして彼はそれを自覚しながらさらに言葉を続けるのであった。
「人間ではなくて」

「あの連中か」
役もまた人間とみなしていない言葉になっていた。目も海を見ているままであるが鋭く今にも何かと撃たんとするものになっていた。
「それしか考えられないな」
「まさかまだ生き残っているとは思いませんでしたよ」
本郷は今度はこんなことを言うのだった。
「いまだにね」
「世界は広い」
役は非常によく使われる言葉をここで出した。
「中にはこうした今だに生き残っている連中もいるということだ」
「実に傍迷惑なことに、ですね」
「傍迷惑でもこれが仕事だからな」
役は本郷に比べて幾分か、いやかなり冷静であった。
「やらなければならない」
「わかってますよ。けれどどうします？」
ここで役に対して問う本郷であった。
「連中をどうするかですけれど」
「少なくとも今日は動かないでおこう」
役はこう本郷に対して答えたのだった。
「今日はな」
「じゃあ明日にですか」
「それも昼に動く」
そうするというのであった。昼にだと。
「そうしよう」
「まずは昼ですか」
「敵が動かない時に動く」
また言う役だった。二人は相変わらず教会の前で海を見続けている。そのうえで言葉を続けていくのであった。
「その時にな」
「そうしますか。決着をつける時はそうもいかないかも知れません

けれどね」
「その時のことはまた考えておく」
今ではないということだった。少なくとも決着をつけるその時はだ。
「またな」
「じゃあ今夜はこれで終わりですか」
「そうしよう。では本郷君」
「はい」
「寝よう」
「ですね。それじゃあ」
こうして二人はこの夜は教会に入って休みを取った。夜の海は今は静かなものだった。しかしそれはあくまで表面だけのことでありその中や奥はどうなっているのか全くわからないのだった。
翌朝二人はまず朝食を貰いそのうえで歯を磨き顔を洗った。牧師は教会の中や外の掃除をはじめた。二人もその掃除等を手伝いながらそのうえであれこれと話をした。
「さて、終わったら早速ですね」
「そうだ。調べる」
役は本郷の今の言葉に応えた。今二人は教会の中をモップ掛けしそのうえで箒ではいたり乾いた雑巾で席や礼拝堂を拭いたりして奇麗にしていた。
そうしながらの会話だった。二人はさらに話を続ける。

第十四章

「海の中に行きますか」
「いや、それよりもだ」
ここで役は考える顔で本郷に対して述べるのだった。本郷は席を乾拭きしており役は床をはいている。そうしながら会話をしているのである。
「今は昨夜と同じことをしたい」
「村や家の中を調べるんですね」
「そうだ。式神を使ってな」
これもまた昨夜と同じであった。彼はそのやり方でまた調べるというのであった。
「やってみるつもりだ」
「式神が見つからなかったらいいですけれどね」
「その心配はない」
言いながら早速懐からその式神の札を出す。だがその札は昨夜のものとは違っていた。
色が黒いのだ。漆黒の紙に白い文字で言葉が書かれている。彼が今出してきた札はそうした黒と白が入れ替わっているものであったのだ。
「これを使うからな」
「黒ですか」
「黒は影だ」
役はここでこう言った。
「これを使えば影と思い見つかることはない」
「何か魔力とかで見つからないといいですけれどね」
本郷はここでこのことを危惧したのだった。そうした相手ともこれまで数多く戦ってきたからこその危惧であった。
「それだけは」

「若し彼等が我々が思っている通りの存在ならばだ」
だが役はここでその危惧する本郷に対して告げるのだった。
「まず気付かれることはないがな」
「ええ、あの連中ならそうですね」
本郷もまたそれはわかっていた。だからこそ役の今の言葉に対して頷くことができたのである。そうしてそれを見届けたうえでさらに語る役であった。
「だからだ。まずは安心していいだろう」
「そうした魔力とかについてはですか」
「連中はまた別の存在だ」
そうだというのであった。
「だからだ。安心していい」
「わかりました。じゃあやってみますか」
「うむ。それではだ」
その手にある札を手首のスナップで投げた。するとその数枚の札は忽ちのうちに空中に散り烏達となった。彼等は一斉にそれぞれの場所に飛び消えていったのであった。
「これで遅くとも三十分後にはわかる」
「果たしてどうなっているかがですね」
「そうだ。さて、今彼等がいるとなればだ」
「それで寝ているとなれば」
「彼等は間違いなく夜に動く存在ということになる」
夜におらず朝にいるとはどういうことなのか。これは夜勤をしている人間についても言えることであった。
「いればな」
「そうですね。今は寝ていますかね」
「そこまではわからないが。とりあえずは」
役は話をしながら目を鋭くさせた。それはまるで何かを見る目であった。
その目で言うのだった。こう。

「いる」
「家の中にいますか」
「殆どの人間が寝ようとしているな」
「そうですか。それじゃあやっぱり」
「奇怪なことだ。生の魚をそのまま丸呑みしている」
式神を通じて見ているものをそのまま本郷に語るのだった。それはまさに異形の光景であった。
「鱗も何も取らず生きたままだ」
「生きたままですか」
「あの大きな口に一匹丸ごと入れてそのうえで噛み砕いている」
語るその光景は実にわかり易いものであった。少なくとも本郷は話を聞いていてすぐに察したのであった。
「人間のできることではない」
「ええ。わかりますよ」
本郷もまた話を聞いているだけでわかった。それが到底人間のできるようなことではないことを。しかも役はさらに言葉を出していくのであった。
「骨も何もかも噛み砕きだ」
「その歯で、ですね」
「そして舌も異様に大きいな」
口の中のその舌も見えているというのである。
「不気味なまでにな」
「やっぱりあの連中ですかね」
「そう思っていい」
役の今度の言葉は断言であった。
「間違いなくな」
「じゃあある程度やり方もわかってきましたね」
本郷はここまで話を聞いて至極冷静に述べたのだった。

第十五章

「まあ海の中で戦ってもですね」
「そのままだと間違いなくこちらがやられる」
こう返す役だった。
「それはわかるな」
「ええ。じゃあどうしましょうか」
「その為には海の中でも戦えるようにしていくことだが」
役の言葉は続く。
「そうした薬もないわけではない」
「錬金術のですね」
「そうだ。そしてだ」
さらに言う役であった。
「君の術も必要だ」
「俺のですか」
「私の周りにも君の周りにも結界を張りだ」
「それで相手の攻撃も水も防ぐんですね」
「その二段でいく。これでどうだ」
ここまで話したうえで本郷に問うてみたのであった。
「それでだ」
「そうですね。悪くないと思いますよ」
暫く考えてからこう返した本郷だった。
「それで」
「そうか。ではそれで決まりだな」
「ええ。それでですけれど」
だが本郷はさらに言葉を続けるのだった。
「その薬っていうのは」
「空気がなくとも呼吸できるものだ」
それだというのである。

「簡単に言えば鰓呼吸ができるようになるものだ」
「それで海の中を進んで、ですか」
「ついでに言えば水面を歩けるようにもなる」
それに付け加えて、であった。それもあるというのである。
「それでどうだ。かなり有利に戦いを進められると思うが」
「そうですね。地上と同じように戦えればそれで問題はありませんからね」
「私も海中では銃を使えない」
ここでは顔を曇らせた役であった。
「それに対する考えもあるのだしな」
「備えあればってやつですね」
「君も手裏剣が使えないが」
「ああ、それはですね」
今の役の言葉に対して楽観そのものの言葉で返してきたのだった。
「大丈夫ですよ」
「大丈夫なのか」
「ええ。海の中でも結界使って使えますし」
こう言うのである。
「普通に投げられます」
「そうか。それならいいのだがな」
「それに持ってるだけでもかなり武器になりますしね」
本郷の言葉が続く。
「いけますよ。連中は飛び道具とかありませんしね」
「あの連中ならないな」
役も考えながら述べる。
「あの神に仕える連中ならばな」
「だから大丈夫ですよ」
またこう言う本郷であった。
「手裏剣も」
「よし。それならばだ」

役は本郷の言葉をここまで聞いたうえで頷くのだった。
「今回は速攻で行くか」
「速攻ですか」
「そうか。すぐに相手を襲撃する」
こう言うのだった。
「すぐにな。それでどうか」
「俺はそういうのが大好きなんですけれどね」
そして本郷も役のその提案に対して笑ってみせ乗り気であるということを見せるのであった。
「もう電撃戦っていうのがね」
「それなら問題はないな」
「ええ。それじゃあ仕掛けますか」
「今夜だ」
もう時間も決めるのだった。
「今夜早速仕掛ける」
「わかりました。それじゃ」
「それまでは英気を養っておくか」
「そうですね。じゃあ昼は寝ますか」
気軽にこんなことを言う本郷であった。

第十六章

「それで力を蓄えて」
「そうするとしよう。今回は早いうちに終われそうだな」
「そうですね。それでですけれど」
ここまで話してからまた話す本郷であった。今度はいささか真剣な顔である。
「帰りはどうするんですか？またオタワまで戻るんですか？」
「それは嫌か」
「嫌かっていうより疲れますよ」
かなりうんざりとした顔にもなるのだった。
「あそこまで延々と車で行くのは」
「カナダ横断だからな」
「もう帰りはすぐに日本に帰りたいんですけれどね」
それが本郷の考えであった。そしてそう考えるのも当然のことであった。
「できるだけすぐに」
「それもそうだな」
本郷の今の言葉に対して役にしろ頷くところがあった。それで実際に彼も考える顔を見せるのだった。それはかなり真剣なものであった。
「帰りまでオタワに戻るというのもだ」
「バンクーバーから帰りませんか」
本郷の提案はそれであった。
「あそこからもう日本に」
「それよりもシアトルか」
だが役はそちらだというのだった。バンクーバーはカナダの街だがシアトルはアメリカの街である。南北で挟む形に位置し合っているのである。

「そちらがいいか」
「シアトルにするんですか」
「空ならあの街だ」
それが役の考えの根拠であった。
「あの街の方が都合がいい」
「じゃあそっちにしますか」
「そう考えているのだがな。今は」
あらためて本郷に対して述べるのだった。
「それでどうか」
「そうですね。それだったらそれで」
本郷も彼の案に対して特に反論はなかった。
「シアトルってことで」
「それにだ」
ここで役はさらに言ってきた。
「どちらかというとカナダよりアメリカの方が食べるものはいいだろう」
「いや、それはもうはっきりしてますよ」
ここでまたうんざりとした顔を見せる本郷であった。それは何故かというと。
「もうね。カナダの食べ物ときたら」
「お世辞にもいいとは言えないな」
「アメリカも言われますけれどね」
アメリカの食事も日本人の間では評判は決して芳しいものではない。しかし本郷はカナダの食事はそのアメリカよりもというのである。
「ここのはそれこそ」
「問題外だな」
「スパゲティ食べて驚きましたよ」
スパゲティのことを話に出してきたのだった。
「完全にのびてるじゃないですか。アメリカでももうあんなのはあ

りませんよ」
「あれには私も驚いたがな」
「しかも肉にしろ」
今度彼が話に出したのは肉であった。
「もうただの炭で」
「名物はパンケーキのシロップだけか」
「カナダってそれがないとどうなるんでしょうか」
「おそらく誰にも覚えてもらえない国になる」
牧師がその場にいないことが救いであった。とにかく酷いやり取りである。少なくともカナダ人に対して話せる内容のものではなかった。
「まずな」
「ですね。アメリカが隣にありますし」
このことがやはり大きい。どうしてもアメリカに注目がいってしまうのである。
「やっぱりカナダっていいますと」
「存在感がなくなってしまうからな」
「食べ物もあれですしね」
「アメリカより遥かにあれだ。イギリスと同じ位か」
「かも知れませんね」
二人の酷評は続く。
「あれじゃあ」
「今はそれで満足できてもだ」
牧師の好意は下手な味付けに勝るというのである。二人もそれを解するだけのものは備えていた。

第十七章

「終わるとな。祝いもしたい」
「シアトルだったらいいステーキハウスもありますしチャイナタウンもありますね」
「それだけではない。多分和食の店もある」
それもあると予想するのだった。
「どれでも好きな店に入られる」
「それじゃあ寿司ですかね」
本郷がここで言ったのはそれであった。
「寿司食べませんか、シアトルに着いたら」
「寿司か」
「久し振りに和食が食べたくなりましてね」
だからだというのである。
「だからどうですか？」
「それはいいが高いぞ」
役はこんなことを言い出した本郷に対して言葉を返した。
「アメリカだと寿司はな」
「そんなに高いんですか」
「他の国の料理はどの国でも高い」
まずはこのことを理由として出すのだった。
「専門の料理人も素材も少なくなるからな」
「だからですか」
「和食は確かにポピュラーにはなったがな」
それでもだというのである。
「だが高いことは高い。日本のそれに比べてな」
「そうなんですか」
「それにだ」
役はさらに言い加えてきた。

「味も違うぞ」
「そんなに違うんですか」
「日本人とアメリカ人ではそもそも舌があまりに違う」
だからだというのである。これはもう言うまでもないことではあった。
「それが大いに関係するからな」
「ってことはまずいんですか？」
本郷はその顔を顰めさせて単刀直入に役に問うた。
「アメリカの寿司は」
「まずいかというとそうとも限らない」
まずいということは否定はした。しかしであった。
「だが日本人の舌に合うかどうかというとだ」
「わかりませんか」
「まず合わない」
今度は実にはっきりとした言葉であった。
「日本人にはな」
「そうですか。合いませんか」
「これもまた文化だ」
舌もまた文化ということである。これは否定できないものであった。何故なら舌はその国の料理に馴染んでしまうものだからである。
「例えばアメリカ人は中々海草を食べない」
「海草を食べないんですか」
「そうだ。食べない」
このことを強く言う役だった。
「最近その和食で食べるようになった位だ」
「じゃあ海苔なんかは」
「馴染みのない食べ物だった」
これまたはっきりと述べた言葉であった。
「本当にな。食べ物とさえ思われていなかった」
「またそれは妙な話ですね」

本郷は完全に日本人として役の言葉に応えるのだった。
「海苔食わないんですか」
「それもまた文化だ」
また文化という言葉を話に出してみせた役だった。
「何を食べ何を食べないのかもな」
「文化っていっても色々ってわけですか」
「そういうことだ。だからだ」
ここまで話してそのうえで話を纏めてきた役だった。
「アメリカの寿司は食べるには少し覚悟と勇気が必要だ」
「そういうことですね」
「そういうことだ。まあ考えてみる必要はあることは言っておこう」
「わかりました。実際に考えさせてもらいます」
本郷は真剣そのものの顔で役に対して答えた。

第十八章

「そういうことで」
「シアトルは他にも食べるものがある」
こう言いはする役だった。
「寿司にこだわる必要もない」
「じゃあステーキか中華料理ですかね」
本郷はまずはそういったものを脳裏に浮かべた。その次は如何にもアメリカといった食べ物を話に出してみせた。
「それかハンバーガーか」
「アメリカのハンバーガーも日本のそれとかなり違う」
ハンバーガーについても言及する役だった。
「それもかなりな」
「何か大きいらしいですね」
「大きいだけではない」
それだけに留まらないのだというのだ。アメリカのハンバーガーは。
「全体的に作りも大雑把だがこれは本郷君も知っていると思うが」
「いえ、シアトルのハンバーガーですよ」
彼が言うのはそういうことだった。シアトルのハンバーガーについてである・
「シアトルのもそうなんですか。やっぱりニューヨークみたいな感じなんですかね」
「流石に味は違うだろうな」
これについてはある程度予想しているといった感じの言葉だった。
「味はな」
「違いますか、やっぱり」
「西と東で随分と離れているからな。同じアメリカでもね」
「日本が間に幾つも入る位にですね」

「だから味が違っていても当然だ」
こう述べるのであった。
「それもな」
「そういうことですか」
「だが。少なくとも寿司よりは口に合うだろう」
「アメリカの寿司よりもですか」
「アメリカのものだと頭でわかっているしな」
それもあるのだという。舌はそのまま頭に直結しているということである。
「だからな」
「そうですか。じゃあシアトルでは寿司にしますか」
「そうするといい。それでだ」
「ええ」
「食べ物の話はとりあえずこれで終わりにしておこう」
今はそれで止めるということだった。
「これでな」
「止めますか」
「アメリカに入ってからでも遅くはない」
だからだというのである。少なくとも今ここで話をしても仕方のないものであることは事実であった。
「カナダ。特にこの村ではだ」
「何もないですからね。見事なまでに」
「それで話しても仕方がないし折角食べ物を分けてくれる牧師様にも申し訳ない」
「不満を言うことにもなりかねないですしね」
「そうだ。だから止めておこう」
こうした配慮もあっての言葉であった。
「それでいいな」
「ええ。じゃあこれで」
「さて。それでだ」

話を変えてきた役はさらに言ってきた。その頃には掃除はもうあらかた終わってしまって最後のチリを塵取りに入れるだけになっていた。
そのチリを入れながら。話をするのであった。
「これからのことだがな」
「まず昼に海の中に入りますか？」
「そうだな。それがいいか」
本郷の提案に応えて頷く役であった。
「そうしてな。ただ」
「ただ？」
「牧師様がいる間は動かない方がいいな」
こう言うのであった。
「その間はな」
「気付かれないようにですね」
「そういうことだ」
彼等はそれぞれ話す。
「今はな」
「じゃあ今は静かにして寝ますか」
「海の底を調べるべきか」
役はふとこんなことも考えた。

第十九章

「一度式神を使ってな」
「そうしますか、ここは」
「そうだな。それがいい」
思い立てばであった。彼はその考えをすぐに行動に移したのであった。
今度は青い紙の札を数枚出す。それを出しながら本郷に対して述べる。
「この札はまた特別な札だ」
「水の中でも使える札ですか」
「そうだ。水の中でこそ力を出す札だ」
言いながら前に投げるとだった。それは数匹のトビウオになって飛んでいった。そうして壁をすり抜けそのまま消えていったのであった。
「これでいい」
「海まで届いたんですね」
「後はあの魚達が見てくれる」
「成程」
本郷はここまで見て微笑んで述べたのであった。
「海には魚ってことですね」
「それだけではない。青だ」
今度は色についても言及してみせた。
「青だからだ」
「青っていうと木ですね」
五行思想においてである。青は東であり木を司る。季節でいえば春だ。それぞれの方角によって色も司っているものも違うのが五行思想なのである。
「それですね」

「木は水に強い」
ここで役は言った。
「あのトビウオ達は青、即ち木の属性を持つ魚達だ」
「といいますと海の中を普通の魚よりも速く泳げてそのうえで色々なものを見られるってわけですね」
「そういうことだ。さて」
ここで早速言ってみせた本郷であった。
「見えてきたぞ。君も見てみたいか」
「そうですね。半漁人を見るよりは海の中を見る方がいいですね」
軽く微笑んで返した言葉であった。
「珊瑚とか様々な魚は見られないと思いますけれど」
「それは期待しない方がいい」
役はそこにもう海のそこを見ながら述べるのだった。
「珊瑚はな。ない」
「まああれは熱帯のですしね」
それはわかっている本郷であった。実際のところわかって言っているのである。つまり軽口を叩いているというわけだ。
「こんな場所にはいませんね」
「そういうことだ。それでだ」
役は右手の親指と人差し指を打ち合わせた。するとここで複数の画面が宙に浮かび上がってきた。どれも色彩のある海中と海底、それに下から見た海面の映像であった。
どれも青くそして澄んでいる。ごつごつとした岩山もそこから姿を見せる様々な動物も海中の魚達もその色は青がかっている。ただ海面は銀色に輝いている。
そうしたものを見ながら。本郷は言うのであった。
「奇麗ですけれど見たいものはまだ見つかりませんね」
「そうだな。それにだ」
「それに？」
「まずいことに鮫もいる」

ここで彼は声を少し不機嫌なものにもさせた。
「鮫がいるな。式神を食われてしまいかねない」
「ああ、鮫はそうですね」
本郷も鮫については知っていた。鮫というものは目に入るものが自分より小さいもの、傷付いたものであれば何でも襲い掛かって食べる。そうした魚である。
「鮫だったらそれこそ平気で食べますね」
「使い捨ての式神だが鮫の餌にするつもりはない」
それは毛頭ないということであった。
「さて。かわしていくか」
「そうですね。わざわざ目を減らしていくことはありませんし」
「そういうことだ。しかし」
鮫をかわしながら式神を操っていく。その中で役はふと言うのだった。
「思ったより何の変哲もない海だな」
「ええ。魚は豊富にいますけれど」
見ればそうであった。割かし多くの種類の魚達が集まっている海であった。本郷も役もそこからあることを見たのであった。
「これはつまり」
「あの魚人達の食料だな」
「そうですね」
このことを察したのであった。本来海にいる者達の糧となるのは何なのか、考えてみればそれはひとつしかないことであった。そういうことである。
「だからこれだけの魚が一杯いるんですか」
「大抵は丸呑みしている」
役はあの家の中で見た光景をここで思い出した。そのうえで言うのであった。
「しかし。大きな魚になるとだ」
「その鮫みたいなのですか」

「鮫は食わないのか」
「どうでしょうかね。食われるのかも知れないですし」
鮫程大きな魚なら人間程度の大きさのものを食うのも訳はない、実際に人食い鮫という種類の鮫も結構多く存在しているのである。海を行くと必ず鮫に気をつけろと言われる国もある程だ。

第二十章

「その辺りどうでしょうかね」
「そうだな。わからないな」
言いながら海を見ていく役だった。
「他にもこれといってないな。どうやらな」
「ですか。どうします？」
「まだ見てみる」
偵察は続けるのだった。まだ見えていないものはあると思ったからだ。
そうして暫く見ているとだった。やがて海底にあるものが見えたのだった。
「んっ！？」
「あれは」
二人同時に気付いた。見ればそこには骨が転がっていた。頭まで完全に骨になった魚の骨だった。その証拠に尾びれや背びれまである。その大きさを見て二人はすぐにそれぞれの口で言った。
「鮫だな」
「鮫ですね」
二人の意見は一致した。それはまさに鮫であったのだ。
「鮫ですか」
「しかも海中で完全に骨になっている」
全て食べられていた。見ればその骨にしろ場所によってはかじられている。実に徹底的に食われたのがわかる無惨な有様であった。
「やっぱりこれは」
「奴等の仕業だな」
「そうですね。間違いないですね」
二人にはわかった。それが誰の仕業であるのかを。紛れもなく今眠ろうとしているこの村の異形の住人達の仕業に他ならかなかった。

「これは」
「大きな魚は海の中で群がって食べるか」
「思った以上に凶暴な奴等みたいですね」
「凶暴なのはある程度察してはいたがな」
それはもう読んでいるということだった。あの外見だけでなく彼等の中に既にある知識がそれを何よりも確かに教えていたのである。
「ここまでとはな」
「俺達も下手をすればってことですね」
その魚の無惨な姿を見ながら口の左端を歪めて笑ってみせる。その魚はどう見ても鮫である。しかも歯はかなり鋭くそのうえ十メートルはある。かなりの大きさであった。
「こんなデカブツだってこうなるんですから」
「そうだな。食人もだ」
「あると考えていいでしょうね」
「むしろ当然と考えるべきだな」
役はそう判断した。本郷も同じである。
「間違いなくな」
「ですね。食われない為にですか」
「考えて動くとしよう」
二人で話していく。
「牧師様に悟られないようにな」
「そうしますか」
「若し」
ここで、であった。その牧師が礼拝堂に入って来た。そうしてそのうえで二人に対して声をかけてきたのであった。二人は彼の気配を察して全ての映像を一旦消した。
「宜しいでしょうか」
「あっ、はい」
「どうしたのですか？」
「明日の朝までの食べ物もワインもあります」

まずは食べ物の話をしてきたのであった。
「それに薪もです。水は井戸にありますので」
「明日の朝までですか」
「はい。私は明日の朝まで他の教会に行っています」
こう二人に話すのであった。
「その間ゆっくりとしておいて下さい」
「他の教会っていいますと」
「村の外にですか」
「はい。そうですね」
ここで彼は笑いながら二人に話してきた。
「その村にしろここから車で三時間程度の場所でして」
「そんなにある場所なんですか」
「そこに行って来ます」
言葉は穏やかなままであった。そのままの言葉で二人に話してきているのだった。
「ですから明日の朝まで戻りませんので」
「そうですか」
「ごゆっくり」
また穏やかな言葉であった。
「林檎もありますので楽しみにしておいて下さい」
「わかりました。じゃあ」
「ゆっくりとさせてもらいます」
「お客様をお迎えしているのに申し訳ありません」
牧師の今の言葉は心からそう述べているものであった。
「まことに申し訳ないのですが」
「いえいえ、いいですよ」
「牧師様にも牧師様の事情がありますで」
「そう言って頂けますか」
牧師は二人の言葉を受けてその目を細めさせた。彼等の言葉は本心からのものである。しかしそう言う事情はわからなかった。わか

っていたらきっと動転していたであろう。

第二十一章

「有り難いことです」
「じゃあ行ってらっしゃい」
「昨日と同じ様に過ごさせてもらいます」
「はい。それではです」
ここまで話してそのうえで二人に深く頭を下げてまた言うのであった。
「行って参ります」
「ええ。じゃあ」
「また明日に」
こうして牧師は己の教会を後にした。後に残ったのは二人だけであった。二人は牧師が村を去ったのを確認してからまたあの式神達が見ているものを見ようとした。それは幸いにして全て残っていた。
「全部無事だったみたいですね」
「そのようだな」
まずはそのことをよしとする二人であった。そのうえで画面を見続けていく。
「ですが」
「どうした？」
「何も見つかりませんね」
本郷はこのことに少し苛立ちを覚えだしていた。そしてそれはその言葉にも出はじめていた。
「本当に何も」
「そうだな。あの鮫の骨以外はな」
「まああれはあれで確かなものですけれどね」
それでもであった。今の本郷はよりよい情報を求めているのであった。
「あれ以外にはまだ何も見つかりませんか」

「奴等自体は今眠っている」
役はここで村人達について述べた。
「それでこれといった動きがある筈もな」
「ありませんか」
「鮫の骨が見つかっただけでよしとするか」
彼はこうも言い出したのだった。
「ここはな」
「それだけですかね、今は」
「知りたいものは全て知られるとは限らない」
こんなふうにも述べる役であった。
「常にそうだとはな」
「そうですね。それじゃあ」
これで観るのを終えようとした。その時だった。
「んっ！？」
「あれは」
二人同時であった。ふとあるものに気付いたのだ。
多くの映像のうちの一つだった。そこにあるものを見たのだ。それが映っているのは海底の映像であった。ふとある穴を見つけたのである。
「あの穴は」
「今まであんな穴はなかったな」
「ええ」
本郷はその穴を見ながら役に対して答えた。
「しかもあの大きさは」
「かなりのものだ」
見れば人数人が一度に入られるまでだ。そこまで大きな穴であった。
「あれだけの穴があればな」
「あの連中も入られますね」
「まさかとは思うが」

ここで役は言った。その穴を真剣な顔で見ながら。
「あの穴の中にあるものは」
「連中の何かですかね」
「その可能性はあるな。それではだ」
「式神を中に入れますか」
本郷はこう提案してきた。
「そうしますか。ここは」
「そうだな」
本郷のその提案に対して頷く役であった。話を聞くうちにであった。
「そうするか」
「ですね。それじゃあ」
「すぐに行かせる」
役も決断を下した。そうして穴の中に式神を進ませる。穴の中は暗闇であった。何も見えはしない。しかしここで役はある術を使ったのだった。
「明かりですか」
「式神の目から出させた。
それだというのである。見ればそれによって確かに暗がりの中が見られるようになっていた。そしてそれを頼りにさらに奥に奥にと進むのであった。
そうして奥に進むうちにだった。二人はその穴、いや洞窟の長さに気付いた。そこにも不審なものを感じ取ったのである。
「役さん、これは」
「怪しいと思うか」
「かなりあからさまに」
本郷の言葉もこれまでの気軽さを出したものではなかった。まるで刀身の如く研ぎ澄まされた鋭いものになっていたのであった。
「そう思いますよ」
「そうか。やはりな」

「多分この先にです」
「あるな」
ここで言った役だった。
「間違いなくな」
「それでどうしますか？」
本郷はさらに役に対して問うた。

第二十二章

「先に行きますか？このまま」
「行かなくては何もわからない」
役はこの言葉を彼への返事とした。
「そして確実に何かがあるのだからな」
「そうですね。それじゃあ」
「先に進ませる」
役は最初からそのつもりだったがあえて言ってみせた。
「先にな」
「ですね。そうするべきですね」
「他の式神達もここに集めるか」
「そうしますか？」
このことに関しては自分では判断を控えた本郷だった。式神を使う役本人にその判断を預けたのであった。
「ここは」
「そうした方がいいな。目は多い方がいい」
彼は言った。
「だからだ。そうしよう」
「そうですか。それじゃあ」
「今は一つだがこれが複数になればだ」
「さらに多くのものが見えるってことですね」
実際に画面はどれも動いていた。それぞれ海面や海中からその穴に向かっていた。青い世界がめまぐるしく動いているのであった。
「確かに今は暗がりばかりですけれどね」
「それでも先に進めば必ず何かがある」
「そういうわけですね。しかし」
役はここでまた言うのであった。
「この穴はまた随分と長いですね」

「そうだな。どれだけあるか」
「二〇〇メートルはあるんじゃないですか？」
首を傾げながら予測して述べた本郷であった。
「それ位はあるんじゃないですかね」
「それだけはあるか」
「今までで、ですよ」
こう言い加えもする。
「それだけはありますね」
「穴の中は曲がりくねっていて思うように先に進めないしな」
「そうみたいですね」
「こうした場所ではいつものことだ」
役はそう言ってそのことは受け入れたのであった。
「だが。それでもだ」
「俺は気が短いからいらいらしてきますね」
「安心しろ、私もこうしたことは好きではない」
役もその彼に告げた。
「何処まで続くかな」
「けれど大体道筋は覚えてきましたね」
本郷はそれについてはこう述べることがdけいたのだった。
「道筋は」
「もう覚えたのか」
「ええ。大体どうなっているかですけれど」
そうした限定ではあってもなのだった。
「頭に入れていますよ」
「頼むぞ。おそらく夜にこの道に入る」
「ですね。どちらにしろ」
「そのうえでこの先にあるものと何かがある」
「何かが、ですね」
「そうだ。何かがだ」
彼は言葉を続けていくのだった。

「ある。間違いなくな」
「何か感覚的にはそろそろ終わるって思うんですけれどね」
本郷は不意にこんなことを述べた。
「そろそろですけれどね」
「そろそろか」
「それで先に何があるのかはわかりませんけれどね」
それについては答えることができなかった。そこまでわかる程度彼も力を持っているというわけではないのである。
「けれどもうすぐですよ」
「そうだな。それならばだ」
「ただ」
本郷の言葉はここでkろえまで以上に鋭いものにもなった。
「先にあるものは絶対に尋常なものじゃないですね」
「あの連中が私達の思っている通りの存在ならばだ」
「ええ」
「あそこにいるのは間違いない。あれだ」
「もう滅んだって思ったんですがね」
他の式神達も穴の入り口に集まってきた。そうして次々に穴の中に入って行く。彼はそれを見ながら今の言葉を出したのであった。

第二十三章

「完全に。そうはいきませんか」
「滅んだ神がまた蘇る」
役の返答はこうしたものだった。
「それは常のことだ」
「常ですか」
「信仰は忘れ去られることもあれば思い出されもするものだ」
そしてこうも言うのであった。
「だからだ。あの神もそれで蘇ったということだ」
「別に蘇らなくてもよかったんですがね」
シニカルに口の左端を歪めさせての言葉であった。
「おかげで面倒なことになってますよ」
「しかしこれが仕事だからな」
「ええ。カナダ政府もわかってたんでしょうね」
本郷はこうも察したのだった。
「ある程度はでしょうけれど」
「そうでなければ我々が呼ばれることはないしな」
「そうですね。何しろ俺達はこうした事件の解決が専門の探偵ですから」
「普通そうした探偵はいない」
役はまた言った。
「私達だけだ」
「全くです。それで」
ここで、であった。先頭を行く式神の視界が変わった。一気に明るくなったのである。
そしてそこに姿を現わしたのは。赤く不気味な世界であった。
「・・・・・・何ですかね、これは」
「海の中なのは間違いないがな」

「しかし。海に赤ですか」
視界を覆うその色に対して本郷は不快感を隠さなかった。
「こんなのははじめてですよ、俺」
「私もだ」
それは役とて同じことであった。実際にその目を顰めさせていた。
「何なのだ、これは」
「ああ、海草ですね」
ここでようやく何故赤いのかわかった本郷であった。
「これは海草ですよ」
「海草か」
「それにしてもやけに細くて多い」
その海草を見ながらの言葉であった。
「妙な海草ですね」
「そうだな。どうもだ」
ここで役はその奇怪な海草を見ていぶかしみながら述べるのだった。
「この海草はこの世のものとは思えないのだがな」
「この世のですか」
「少なくとも人間の世界にあるものではないな」
こう見ているのであった。彼は。
「この海草はな」
「そういえばそうですね」
そして彼の今の言葉に頷く本郷だった。彼もそう判断したのである。
「こんな海草は見たことがありませんね、今まで」
「血にも見える」
これはその色から想像されることであった。
「そして触手にも見える」
「イソギンチャクのあれみたいな」
「その極めて長いものか。そういう類だな」

「どちらにしてもまともなものじゃありませんね」
「そうだな。どうするかだが」
役はここでまた考える目になるのだった。
「さらに先に行くか」
「それしかないですけれどね」
今の本郷の言葉の通りであった。その為に式神を使いここまで見てきたのである。そうでなければ来なかったしそれに先を見なければこれまた意味のない話であった。
「ですからやっぱり」
「よし。それではだ」
「行かせましょう」
こうして式神をさらに行かせることになった。しかしであった。ここでその式神の視界が消えた。それまで出ていた映像が消えてしまったのである。
「これは！？」
「やられたか」
役はその四角い立体テレビを思わせる映像が消えたところで察したのだった。
「どうやらな」
「やられたっていうと奴等にですか」
「そうだ。勘付かれたか？それとも」
「それとも？」
「知られたか」
役はこうも言った。ここで。
「どちらかか」
「どっちでもかなりまずいみたいですね」
「その通りだ。ここで偵察は打ち切るとしよう」
役はその映像が消えたところで他の式神達も消した。右手を人差し指と中指だけの印にしてそれを右から左、そこから左に一閃させるとそれで全ての映像が消えてしまったのだった。

第二十四章

「これでよし、だ」
「式神の術を解いたんですか」
「そうだ。これであの式神達はだ」
「ただの紙に戻ったんですね」
「あとは海の水の中で消えていく」
それで終わりだというのである。
「これでよし、だ」
「俺達まで勘付かれる前にってことですね」
「そうだがあの最初の式神が消えたところで勘付かれていてはまずいな」
役はその危険を考えてその整った眉を顰めさせた。
「そうなってはな」
「ええ、その危険はありますね」
「最悪のことを考えておくか」
そしてこう述べるのであった。
「ここはな」
「最悪の、ですか」
「我々の仕事は常にその最悪の事態ばかりだがな」
「それは絶対に否定できませんね」
本郷は今の役の言葉にはおかしそうに笑って返した。
「戦ってばかりですからね」
「今回もそれは当然のことだと考えていたがな」
「向こうから来てもですか」
「おそらく今はない」
それはないという役だった。
「夜だ。来るとすればな」
「ですね。奴等の時間に」

「我等が来るその時にだ」
役は言葉を続けていく。己のその言葉をだ。
「罠を仕掛けるなり布陣を整えるなりしてくるだろうな」
「今は大人しくして、ですか」
「何らかの手段で村の連中に我々のことを伝える」
そうなる前の前提をここで言う役だった。
「そのうえで仕掛けて来るかもな」
「じゃあそうなってもいいように」
「備えはしておく」
役はまた言った。
「武器も。それに」
「それに？」
「この教会にもだ」
二人が今いる教会にもだという。備えをしておくというのだ。
「結界を張っておくとするか」
「攻めてくるかも知れないってことですね」
「その可能性もある」
最悪の事態は一つとは限らない。複数のケースが考えられる。役はこのことを念頭に入れてそのうえで今の様に対策を出しているのである。
「だからだ」
「そうですね。数で囲んで一気にってことも考えられますし」
「幸い札は多くある」
懐から次々に出してみせる。確かにその種類も数もかなりのものである。
「その中には結界のものも多くある」
「そういったのを使っていくんですね」
「そうだ。まずこれ等をあるだけ使い」
「じゃあ俺もですね」
ここで本郷も言うのだった。

「あの術を使いますか」
「あれをか」
「その時にはです」
こう言うのであった。
「使いますよ。あれは便利ですしね」
「そうだな。それではだ」
本郷の今の言葉を受けて札を数枚程度彼に投げてきた。見ればそれは白い札であった。どの札にも筆で黒い文字が書かれている。それが何かはすぐにはよくわからないがとりあえず漢字であるのは本郷にもわかった。
「あの術を使う時にはこの札を身体に貼るのだ」
「この札は？」
「気力の減少を抑える札だ」
それだというのである。
「戦いはここだけでは終わらない。まだ続くからな」
「長期戦に備えてですか」
「そういうことだ」
「ここで戦いは終わらずに」
「やはり海だな」
役は今この教会でのことだけを考えていなかった。先のことも見ていた。今先程のあの洞窟の先を。そこを見ていたのである。
「あそこで戦うことになるな」
「というよりはそこが本番ですね」
「そうだ。だからここで戦うことになってもだ」
「この札でセーブしろってことですか」
「そうでなくとも今回はできるだけセーブしながら戦うべきだろうな」
役は考える顔で述べた。

第二十五章

「相手が相手だからな」
「村人だけじゃ問題じゃないですけれどね」
「あいつがいればだ」
役の言葉がここでまた鋭いものになった。
「生半可なことでは勝てはしないからな」
「二人がかりでもですね」
「そうだ。相当な強さであるのは間違いない」
言葉に油断はなかった。そして楽観視しているものもなかった。
「だからだ」
「わかってますよ、それは」
本郷もまた今は笑っていなかった。真剣そのものの顔であった。
「相手が洒落になりませんからね」
「その通りだ。さて、夜になるまではここに立て篭もる」
「はい」
「それからだ。動くのは」
まず夜まで待つということだった。時間を待つというのである。
「いいな」
「その間休めたらいいんですがね」
「交代で休むか」
役は本郷の言葉を聞いてこうも言った。
「結界を張ってからな」
「その間に英気を養ってですね」
「何度も言うが今回は相手がかなりの強さだ」
役はこのことにかなりの警戒の念を持っていた。そしてそれを本郷に対して隠すところがなかった。それも全く、であった。
「だからこそだ」
「じゃあまずは結界を張ってから」

「君が先に休むといい」
役は彼に告げた。
「先にな」
「いいんですか？じゃあ二時間ばかり」
「これを使えばいい」
今度出してきたのは黄色い札だった。それを本郷に対して手渡したのであった。
「これを使えばすぐに眠ることができる」
「へえ、そりゃまた便利な札ですね」
「術にも色々なものがある」
役は本郷に告げた。
「その中にはこうした眠らせるものもある」
「本来は敵を眠らせる為のものですか？」
「そうだ。他には砂もあるがな」
「ああ、サンドマンの」
砂と聞いてすぐにそれだと察した本郷だった。彼も西洋の魔術のことは知っていた。役は陰陽道だけでなく西洋の魔術や中国の仙術も使えるのである。
「あの砂ですか」
「それを使うこともできるしな」
「今その砂もありますか？」
「持って来ている」
役は答えた。
「そして今出すことができるが。そちらにするか？」
「いえ、今はこの札でいいです」
それでいいと答える本郷だった。
「何か面白そうですし」
「二時間経てばだ」
今度は黒い札を出してきてそれを彼に見せながら述べた。
「これを貼る」

「それを貼れば起きるんですか」
「眠らせる為のものもあれば起こす為のものもある」
役はその相反するものをそれぞれ話に出してみせた。
「そういうことだ」
「そうですか。じゃあ二時間経てば」
「起こす。何かがあってもな」
「ええ。そういうことで御願いしますね」
こうやり取りをしたうえで自分の額にその黄色い札を貼ってすぐに眠りに入る本郷だった。額に札を貼ったその姿はいささか中国の吸血鬼を思わせるものであった。
二時間経つと役は自身の左胸、心臓の前にそれを貼り休んだ。そして本郷が起きて警戒に当たる。そういうことを繰り返しているうちに夜になった。この時間彼等は来なかった。
「結局夜まで何もなしでしたね」
「そうだな」
「おかげでじっくり休めましたね」
すっかり暗くなった礼拝堂の中で背伸びしながら述べる本郷であった。窓から黄色がかった白い満月の光が朧に差し込んできていて礼拝堂の中を照らしていた。
「さて、それじゃあ」
「行くか」
「ええ、そうしましょう」
顔を見合わせてそれぞれ言い合う。
「いざ海へ」
「用意はできているな」
役は既に札をあるだけ持っていた。そしてその右手には既に拳銃もある。

第二十六章

「君も」
「ええ、ここに」
言いながら早速右手に日本刀を出してみせるのであった。
「ありますよ」
「よし、それならだ」
「海の水に濡れずに浮かべる札は」
「これだ」
すぐに青い札を二枚出しそのうちの一枚を彼に差し出した。
「これを貼ればいい」
「そうですか。じゃあ服の裏にも」
「貼っておくのだ。私もだ」
己の背広の裏にすぐに貼る彼であった。
「これでいい」
「後は俺の結界ですね」
今度は本郷が言ってきた。
「それで完璧ですね」
「二重でな」
「用心には用心ってわけですか」
そしてこうも言うのであった。
「そのうえで敵地に、ですね」
「奴等は明らかに待っている」
既にそれを読んでいる本郷だった。
「今まで仕掛けて来なかったのだからな」
「そうですね。間違いないですね」
「さて、どんな布陣なのかだがな」
「絶対に海の中にいますよ」
本郷は何か見えないものを見るような目であった。

「奴等のことを考えればね」
「そうだろうな。そして中に入ればか」
「待ち構えて一気にですね」
「そうだろうな。ではそれに備えてだ」
「まずは敵の機先を制しましょう」
本郷はここでは戦いのやり方を考えていた。戦術というレベルでだ。
「それで敵の勢いを殺してそれからですね」
「反撃に転じるか」
「そうすれば楽ですよ。敵の数は」
「村人だけだと四百程度だな」
まずはこの村にいる者達の数を頭の中に入れての言葉であった。
「そしてだ。海の中にいるとしてもだ」
「そっちがどの位か、ですね」
「合わせて千もいないか」
本郷はここでも少し考えそのうえで数を出してみたのだった。
「千もな」
「まあ多くてそんなところでしょうね」
本郷もまた数について考えてみた。その結果はどちらもこうした数であった。
「多分ですけれど」
「千だとすればだ」
本郷はその数字を出したうえでさらに言うのであった。
「二人で千を相手にするとなればできるだけ一度で数を減らしていくか」
「一度でですか」
「君には分身があり」
本郷に顔を向けてそのうえでの言葉だった。
「他にも術はあるな」
「忍術でいいですかね」

本郷がここで出した術はそれであった。
「忍術だったら一気に減らせますけれど」
「そうだな。ではそれで頼む」
役も彼のその言葉を聞いたうえで頷いてみせた。
「千もいるとなると少しでも早いうちに敵の数を減らしておかなければな」
「こっちがやられますからね」
「そういうことだ。さて」
ここまで話したうえで役は目を海の方にやった。そうしてまた話すのであった。
「話はこれまでにしてだ」
「行きますか」
「行くとしよう。連中を倒してからが本番だ」
「でしょうね」
そんな話をしたうえで教会を出る。夜の村はまずは静まり返っていた。波音だけが聞こえ人影もない。海にはその黄色がかった白い満月が浮かんでいた。それだけであった。
「さて、静かですね」
「そうだな」
その海を見ながら本郷の言葉に頷く役だった。今二人は静かにその海に向かっていた。その中にも鋭い緊張がこもっていた。そうした中での動きだった。
「今のところはな」
「てっきりもう取り囲んでるとでも思っていましたがね」
「あくまで得意な場所で戦うつもりか」
役はここでも海を見ていた。
「奴等のその庭場でな」
「庭場どころじゃないでしょうね」
本郷は役の今の言葉にこう返すのだった。

第二十七章

「遊び場でしょうね、連中にとっちゃ」
「そうか、遊び場か」
「それだけに戦うとなっちゃ自信があるんでしょうね。ただ」
「ただ。何だ」
「そこが狙い目ですね」
また言う本郷だった。
「遊び場っていうだけで俺達には楽勝でいけるって思ってるんでしょう。策も仕掛けていますしね」
「そうだな。それも狙い目だな」
「思う存分やってやりますよ」
海に向かって歩きながら楽しそうに笑っている本郷だった。そしてその横には役がいる。二人は並んで海に向かっていくのであった。そうしてここで。
「それではだ」
「先手を打ちますか」
「海にいるならばだ」
既に戦いははじまっている、それをわかっている今の役の目であった。
「空だ」
「そうですね。まずは空から」
「使うといい」
すぐに白い札を本郷に投げた。そして彼もまたその白い札を備える。すると二人の背にそれぞれ一対の翼が生えたのであった。
「翼ですか」
「まずは飛ぶ」
役はまた言った。
「そして空から仕掛けるとしよう」

「奴等は俺達がそのまま海に入って来るって思ってるでしょうね」
「間違いない」
役の今の言葉は確信そのものであった。
「それはな」
「ですね。じゃあそこを衝いて」
「先んずればだ」
まずはこの言葉を出す役だった。
「そしてだ。敵の虚を衝く」
「孫子ですね」
「数が多いならばそれはそれで戦い方はある」
言いながら二人海の上にあがった。そこから見えるものは。
海の中に隠れている無数の異形の者達であった。空からはどういった姿かは詳しくは見えない。しかし鱗の身体に魚そのままの巨大かつグロテスクな顔はそこからでもはっきりと見えるものであった。それは明らかに人のものではない、そうしたものだった。
「あの連中ですね」
「上から見る限りだとあれは」
「ええ、思っていた通りですね」
鋭い目で隣に飛ぶ役の言葉に答えたのだった。
「あいつ等ですね」
「そうだな。それではだ」
「早速やっていいですか？」
こう役に問うたのだった。上を飛びながら。
「分身使ってそのうえで」
「忍術を使うか」
「それならあの連中一気に減らせますけれど」
下に集まっている彼等を見ての言葉である。
「それこそね」
「なら使うといい」
役も言いながら既に何かを出していた。見ればそれは剣であった。

「私もこれを使う」
「剣ですか」
「ただの剣ではない」
既に右手に持っている。それは緑色の刀身を持っている。
「この剣がな」
「成程、連中の為ですね」
「そうだ。水の中は確かに奴等の遊び場だ」
それはよくわかっているのだった。最早言うまでもないことであった。
「しかしだ。だからといって」
「奴等にとって危険なものがないわけじゃない」
「過信は禁物だ」
役はここでこうも言った。
「そこを付け込まれるからな」
「俺達みたな連中にってことですね」
「そういうことだ。さて」
ここまで話して、であった。
「ではやるとするか」
「そうですね。見たところ連中は」
本郷は一旦海を見た。上を見上げている影は一つもなかった。それを見てまずはにやりとするのであった。
「気付いていませんしね」
「そうだな。誰も上から来るとは思っていない」
「精々あれですね」
本郷はまだ彼等を見ていた。様子を窺い続けている。

第二十八章

「海面にいるって位でしょうね、考えるのは」
「海にいるが故だな」
「ええ、わからないってことですね」
「しかし我々は陸と海だけではない」
役もまた彼等を見下ろしてそのうえで様子を窺い続けている。そのうえでの言葉であった。
「こうして空もある」
「術を使ってですけれどね」
「そういうことだ。それではだ」
「やりますよ」
本郷は言った。
「今から」
「まずは分身だな」
「ええ、ほら」
言いながらであった。本郷が二人、それから三人、四人と増えていく。最後には五人になったのであった。
「それでです」
「その手に持っている球を投げるか」
「これは効きますよ」
五人の本郷が一斉にその右手に持っている球を掲げてみせてそのうえで不敵な笑みを浮かべたのだった。
「海の中なら余計にね」
「爆雷か」
「まあそんなところです」
こう答えるのであった。
「海の中で使えばまさにそれです」
「海の中の相手に対してはやはり爆雷だな」

「そういうことです。それじゃあ」
五人の本郷が一斉に海面に向かってその手にしている球を投げた。
球はそれぞれ海の中に落ちる。それから暫くして。
五つの大きな爆発が海中で起こった。それにより巨大な水柱が発生したのだった。
「よし、成功ですね」
「上手くいったな」
「ええ、全くです」
本郷はその五つの水柱を満足な顔で見て述べた。
「これでどれだけ減りましたかね」
「少なくとも二百は減ったか」
「二百ですか」
「三百かも知れない」
その辺りは詳しくはわからないということだった。今の時点では。
「そしてだ」
「今度は役さんですね」
「そういうことだ。この剣で」
剣には雷が宿っていた。それは今まさに剣から放たれれんとしていた。その剣を構えながら。役は言うのであった。
「彼等を撃つ」
「水には雷ってわけですね」
「爆雷も効くがこれもかなりのものだ」
役はこのことにかなりの自信を持っていた。今それを放つというのである。
「さて、使ってみせよう」
「ええ、そういうことですね」
役は言葉を発さずそのまま剣を下に繰り出した。ライトグリーンの眩い雷が海面に突き進む。そうして雷は瞬く間に海面を、その中を覆い尽くしてしまったのだった。
雷が荒れ狂う。その中は見えはしない。ただ無数に分かれてしま

った雷達がめいめい龍の如く暴れ回るだけであった。そうしてその雷が消えた時。
海面に次々と異形の者達が浮かび上がってくる。それは百やその程度では効かなかった。所々なくなった屍もある。それはどうやら先程の本郷の爆撃のせいらしかった。
「どうやらかなり」
「効いたようだな」
二人はその浮かび上がって来た異形の者達を見ながら言うのであった。
「半数以上は倒したみたいだな」
「ええ。六割ってところですかね」
その浮かび上がってくる異形の者達を見ながらの言葉である。
「どうたら」
「そうだな。そうした辺りか」
「成功ですかね」
その状況を役に対して問う本郷だった。
「これは」
「そう考えてもいいだろう」
役もそれでいいとするのだった。
「それでだ」
「ええ。いよいよですね」
「まず機先は制した」
それは終わったというのであった。

第二十九章

「それも満足すべき結果にだ」
「あとはさらに満足する結果を生み出す為に」
「行くぞ」
本郷に対して告げた言葉は一言であった。
「海の中にな」
「ええ。結界はもういけますね」
「大丈夫だ。それはもうな」
いいというのであった。
「だからこそだ」
「行きますか」
こうして二人は海面に急降下していく。海面に着くと同時にその翼は外れた。そうしてそのうえで本郷の分身達共々海の中に入ったのであった。
海中に入ると。予想通りの外見の異形の者達がいた。
鱗に水かきのある手足、そして異形の顔、全てが不気味な青のその者達が海の中にいた。彼等は二人と分身達をそのまま取り囲んでいた。
「やはりな」
「連中でしたね」
「その通りだ。深き者共」
役は本郷の本体に応える形で言った。
「その者達だったな」
「ってことはですね」
「あの海底の洞窟にいるのはだ」
「奴ですか」
言葉を出す本郷の言葉は遠くを見据えたものであった。
「奴ですね」

「間違いないな。奴しかない」
役もまた応えて言う。
「奴しか。この者達を動かすことはできはしないからな」
「滅んだって思ったら蘇るなんて」
「神は滅びようとも蘇ることができる」
役はここでもこの言葉を出したのだった。
「そういうものだからな」
「何度でもってわけですか」
「それなら対処は簡単なことだ」
うんざりとした調子で述べた本郷に素っ気無く返す役だった。そうしてそのうえでこう述べるのだった。
「その都度倒せばいいのだからな」
「それだけだっていうのですね」
「他に何がある？」
こうも問い返してみせたのだった。
「その都度倒す以外に。ないな」
「まあそうですけれどね」
そして本郷の結局のところ彼と同じ考えだった。だからこそ頷くのだった。
「それじゃあ」
「まずはこの連中を倒してだ」
「そのうえで、ですね」
「あの洞窟の中に向かう」
既に行動は全て決めているのだった。
「それでいいな」
「ええ。果たしてあの洞窟の向こうに何があるか」
「それはここで生き残ってからわかることだ」
「そういうことでね。見たところ」
周りを見回す。上下左右前後至る場所にその深き者達がいる。魚のものそのものの不気味な、感情のない目で二人を凝視してきてい

た。
「随分数も減って残っている奴等も傷付いていますけれど」
「それでも逃げるつもりはないようだな」
「恐怖って感情はないみたいですね」
本郷はそれを見てこう述べるのだった。
「どうやら」
「人ではない、いや」
「いや？」
「本来ならこの世界にいてはならない存在だ」
その彼等を見回しての言葉である。顔の半分以上はあろうかというその大きく開いた口には三列の歯が連なっている。それはそのまま牙であった。
「この世界にいるものならば恐怖は備わっている」
「本能としてですね」
「しかしそれとは別の世界の存在ならばだ」
「そんな感情も持っていませんか」
「そういうことだ」
役は彼等に対してこう分析しているのだった。そしてそれはほんの僅かも外れているもののない分析だった。
「彼等はな」
「じゃあ来ますか」
「死なない限り私達を攻撃して来る」
彼は断言したのだった。
「幾らでもな」
「つまり俺達が死ぬかこの連中が一匹残らずいなくなるかですか」
「そのどちらかだ」
それしかないということであった。

第三十章

「いいな。それで」
「まあ覚悟っていうかわかっていましたしね」
本郷は言いながら刀を構えた。それと共に手裏剣も持つ。それは苦無型の手裏剣であった。その二つをそれぞれ出した上でまた言うのであった。
「じゃあ」
「やるか」
「やるっきゃないですね」
言うその顔は楽しそうな笑顔でのものだった。
「今更逃げ帰ってちゃ仕事にもなりませんし」
「それもある。仕事をしないと生きていけない世界だからな」
「まあ世知辛い理由もついてますし」
「逃げるわけにはいかない」
「そういうことですね。じゃあ」
「来たな」
十匹程度一斉に襲い掛かってきた。その半数以上が身体の何処かに傷を受けなくなってさえいる者もいた。しかし彼等はそれを意に介することなく二人に向かって来たのであった。
来たのは正面からだけではない。後ろからも上からも下からも来る。本郷は上からまっ逆様に来た一匹に左手に持つその刀を突き出した。それだけでその額を貫いたのだった。
「まずは一匹ですね」
「油断するな」
「ええ、わかってますよ」
応えながらその刀を前に払う。すると深き者の頭まで断ち切りそのうえで前から来たもう一匹を唐竹割にした。これで二匹目であった。

その刀は続いて円に斬った。それで横と後ろから来た三匹を斬り捨てた。首を半分まで斬られた者や胴を裂かれた者がそれで沈んでいく。
続いて一匹下から来たがそれには蹴りを入れた。目と目の間に爪先で蹴りを入れたのである。
それは人ならば急所となる場所だ。だが深き者に対してはどうか。本郷は蹴りを繰り出しながらそんなことを考えていた。果たしてどうなるか彼にはわからなかったのだ。
「これで効果がなければな」
刀で斬るつもりだった。しかしそれには及ばなかった。
そこを蹴られた深き者はゆっくりと崩れ落ちていく。そうして彼もまた海の底に沈んでいく。人の急所は彼等にとっても急所なのであった。
こうして瞬く間に六匹の深き者達を倒した本郷だった。そして役もその間に四匹の彼等をその手に持っている銃で何なく倒していたのであった。
「結界を張って正解でしたね」
「海も中でも満足に動き攻撃できる」
「それに呼吸もできますし」
それも実に大きなことであった。
「幾らでも戦えますよ」
「そういうことだ。敵地に入るにはそれに相応しい備えをしておく」
「ええ」
役の言葉に頷くのだった。
「その通りですね」
「おかげで充分に戦える」
第一波を倒してそのうえで構えを取り直しながらの言葉だった。
「こうしてな」
「そういうことですね。さて、次は」
「また来るな」

言った側からであった。すぐに第二波が来た。今度は二十はいた。
二人が容易ならざる相手と見てのことだった。しかし本郷はその彼等に対して己の分身達をすぐに向かわせて斬り込ませたのであった。
「数で来たらこっちも数ってね」
彼自身も斬り込む。彼は真下から来る深き者達に踊り込んだ。そうして忽ちのうちに彼等を斬り捨ててしまった。空からの攻撃によりダメージを受けている彼等では満足に動ける本郷とその分身達の相手ではなかった。
だがすぐに第三波が来た。今度も二十程度であった。
本郷は再び分身達を向かわせようとする。しかしここで役が言うのだった。
「次は私だ」
「役さんがですか」
「そうだ。行かせてもらう」
言いながらすぐに札を出した。それは数枚の赤い札であった。
札達を投げるとすぐに赤い龍になった。それぞれ数メートル程度であるがその龍達が海の中でうねり狂いながら深き者達に向かい。その身体にまとわりついたのであった。
「！！」
「！？」
するとだった。まとわりつかれた彼等は海中で燃え出したのだった。有り得ない光景が海の中で起こっていた。
「これも結界の結果ですか」
「そうだ」
まさにそれだと答える役だった。
「こうしたことも海中でできるようになった」
「何か俺達にとってかなり有利じゃないですか？」
「少なくともそれ位でないとこれだけの数の相手はできない」
役の言葉は至って冷静なものであった。

第三十一章

「違うか、それは」
「言われてみれば」
言っている側から来た。その深き者達を今度は手裏剣で先手を打って倒していく。それぞれ胸や喉や額を貫きそのうえで倒していく本郷だった。
「その通りですね」
「まだ何百もいる。それではこの程度はハンデにもならない」
「海の中で満足に動けてもですか」
「そういうことだ。また来るぞ」
「ええ」
「これからは向こうも容赦しない」
その通りだった。今度は一斉に来た。凄まじい形相の彼等が一斉に二人に襲い掛かる。最早その手と牙で我先に食い千切り切り裂かんというのであった。
本郷は刀を振り回し役もその手にあの冷気の剣を出した。その二本の剣で彼等を次々に切り裂き乱戦を繰り広げていくのであった。
やがて彼等の周りにいる深き者達はその数を大きく減らしていた。だがそれでも彼等は怯むことなく次々と襲い掛かってき続けてきていた。二人はそれを相手にし一歩も引かなかった。
深き者達の数は一匹、また一匹を減っていく。そうして一時間半程度戦ったその時には。海の中にいるのは二人だけとなっていた。他の深き者達は皆海底に落ちていた。
その海底に禍々しい異形の骸を転がらせている。首や手首が海の中に浮かんでもいた。辺りは彼等のドス黒い血までもが漂っていた。
本郷はその血を見ながら。役に対して言ってきたのだった。
「危ないですかね」
「君もそう思うのだな」

「ええ。それに夜ですしね」
今度は夜という言葉も出す本郷だった。
「すぐに来ますよ、奴等」
「そうなれば余計な戦いをしてしまうことになる」
役は本郷に対して冷静にこう述べたのだった。
「そうなれば無駄に力を消耗してしまう。それは避けなければならない」
「でしたら。もう行きますか」
言いながら分身の術を解く。するとそれまで五人だった本郷が四人になり三人になった。そして二人になり最後には一人に戻った。一人に戻った上でまた言うのであった。
「あの洞窟に」
「行くとしよう。ここは一刻も早く立ち去るべきだ」
「何かもう来ましたからね」
見れば遥か前にだ。やたらと大きなものが二人の方に来てきたのである。
それは一匹だけではなかった。次から次へとやって来る。二人はそれ等を見てすぐに動いたのであった。
そうしてその場から離れる。安全な場所に至ったと見て後ろを振り向いてみると。深き者達の骸は片っ端から貪り食われていた。そんな情景がそこにはあった。
「海ってのは恐ろしい場所ですね」
「ああした連中がいるからか」
「ええ、あれが」
それは鮫だった。鮫達は驚くまでの数が来てそのうえで骸を貪っていた。それはまさに地獄絵図であった。中にはまだ息アあった深き者達もいたがお構いなしであった。そのまま頭からかじり取られ食われていき丸呑みにされていく。中には同じ鮫同士で喰らい合ってもいた。
そうした光景を見ながら。本郷はまた言うのだった。

「あの連中の方が厄介かも知れませんね」
「相手をするならな」
「でかいですしね」
その大きさは尋常なものではなかった。中には十メートル近いものも見た。見ればそれはあの有名なホオジロザメ、英語名でマンイーターシャークであった。
「まあ早いうちにあそこから離れて正解でしたね」
「残っていれば我々もあの中にいた」
「そういうことですね。ぎりぎり離れられたってことですね」
「そういうことだ。それではだ」
「ええ」
役の言葉に頷きそのうえでさらに進む。そうして教会の中から見たあの洞窟の入り口に辿り着いたのであった。
その前に来ると本郷はまず。剣呑な面持ちになった。そしてその面持ちで語るのだった。
「何かね」
「君も感じるんだな」
「感じない方がおかしいですよ」
こう役に言葉を返した。その表情のままで。
「あの時は気配までは感じなかったんですけれどね」
「そうだな。映像は所詮は映像だ」
「そういうことですね。けれど今は」
「いるな、奥に」
役もまた同じ顔になっていた。
「これは間違いなくな」
「ですね。いますね」
本郷は役の今の言葉に強く頷き返した。
「これは」
「行くしかないが」
「行けば地獄ですか」

「地獄を見るか？」
これまでで最も真剣な顔で本郷に問うたのであった。

第三十二章

「どうする？見るか？」
「地獄はもう何度も見ていますからね」
本郷は笑ってこう返しはしたがその目は今は笑っていなかった。
「ですから」
「それが答えだな」
「答えるのは楽ですよ。何故ならですね」
そしてこんなふうにも言うのだった。
「選択肢は一つしかないですから」
「一つしか、か」
「ここまで来たら。いえ、最初からですね」
言葉を言い換えたのだった。こうしたふうに。
「それは。最初から一つでしたよ」
「この仕事を引き受けたその時にだな」
「そういうことですね。それじゃあ」
「行くか」
あらためて本郷に対して告げた役だった。
「それではな」
「ええ。じゃあ」
本郷も頷く。そうして二人は遂に洞窟の中に入ったのであった。
洞窟の中に入ると役はまずその左手に灯りを出した。これも魔法によるものだった。
「灯りがあればですね」
「敵に察せられる恐れはあるがな」
その危険は既に頭の中に入れているのだった。
「それでもだ。暗闇の中ではかえって危ない」
「そうですね。何が来るかわかりませんしね」
「一応あれだけ倒したがな」

話は深き者達についてのことにもなっていた。
「まだいてもおかしくはない」
「ですね。何しろ奴等の根拠地ですから」
「前からどれだけ来てもな」
「後ろにもいますかね」
ここでこう言った本郷だった。
「ひょっとしたら」
「いや、それはないな」
「ないですか、それは」
「後ろにいるとすれば先程の戦いでの生き残りだが」
それだと役は言うのであった。
「しかしだ。今はだ」
「全部俺達が倒しましたしね」
「そのうえで鮫の餌食になっている。とても生き残りがいるとは思えない」
これが結論だった。後ろからの攻撃に対する。
「だからだ。そちらは気にしなくていい」
「そういうことですか」
「前だけでいい」
役は言い切った。
「今はな。前から来る相手だけを気にしていればいい」
「そういう意味では楽ですかね」
「楽か」
「敵が一方から来るなら楽ですよ」
本郷はこういう考えであった。
「それならですね」
「そういう考えもあるか」
「少なくとも俺はそうですね」
「そうだな。君らしい言葉だな」
「そしてそれは役さんもですね」

不敵に笑いながら役に対して告げてみせてきた言葉である。
「違いますか？それで」
「その通りということにしておこう」
今の役の返答はこうしたものだった。
「今はな」
「じゃあ。行きますか」
「このままな。さて、これで半分程度行ったが」
「ええ」
距離はある程度わかっていた。既に式神を行かせた時にそこまで測っていたのだ。二人共ただ見ていただけではないのである。
「そうですね。それ位ですね」
「そして出口にはだ」
「あれですね」
本郷の言葉が鋭いものになった。
「あれがありますね」
「赤い海草がな」
「あれは何なんでしょうかね」
本郷は暗闇の中で顔をいぶかせながら述べた。

第三十三章

「一体。何なんでしょうか」
「それは私にもまだわからない」
役もまだ答えかねるものであった。
「しかしだ。進んでいけばわかることだ」
「進んでいけばですね」
「そういうことだ。進めばな」
本郷の言葉も鋭いものだった。彼はその中であるものを見ようとしていることは内心察していた。それは言葉には決して出さないものであったが。
やがて目の前に光が見えてきた。それと共に赤いものがだ。
「見えてきましたね」
「遂にだな」
二人は呼吸を合わせたかのようにしてそれぞれ言った。
「さて、問題はこれからですけれど」
「あの中に入ってからだな」
「まずはどうします？」
二人はまだ歩いている。本郷はその中で役に問うたのである。
「あの海草は」
「切るか」
役がとりあえず出した結論はそれであった。
「それからだな。まずは」
「切りますか」
「放っておいてはどうなるかわからない」
役はこうも言った。
「だからだ。どう思う？」
「そうですね。それでいいと思います」
その考えには本郷も同意するのだった。

「やっぱり。あの海草は」
「普通の海草ではないな」
「確実に、ですね」
確信だった。そしてその確信は二人共通であった。
「じゃあやっぱり切った方がいいですね」
「切って終われればいいがな」
役のここでの言葉はその先を既に見据えたものであった。
「それでな」
「終わらないですかね、それじゃあ」
「そう思っておいた方がいい」
やはりこう考えているのだった。
「そうな」
「ですね。じゃあ」
「切って。それで」
役はさらに言う。
「それから何かするとしよう」
「ええ。それに出口にだけあるとは限りませんし」
本郷もまた考えていた。彼もまた先を考えているのだった。
「その先にも」
「あるかも知れないな」
「あの海草が尋常なものでなければ」
「そうだな。それではだ」
「それを確かめる為にも」
「行くか」
何につけてもまずはそれであった。
二人はさらに進みそうしてであった。遂に出口に辿り着いた。
出口に辿り着くとまずはその手にしている刀と剣でそれぞれ海草を斬る。すると海草はまずは何なく海底に落ちていくのであった。
「これで終わりですかね」
「そう思いたいがな」

役が本郷にこう応えたその時だった。
すぐにその海草達が動いてきた。切られてもなお動きそのうえで二人に襲い掛かってきたのだった。二人の危惧は残念ならば当たってしまった。
「くっ、やっぱりですね」
「予想していた通りだ。それならだ」
「俺はこれ使います」
言いながら出してきたのは数個の小さな球だった。
それを切られながらも漂いつつ自分達に向かって来る海草に投げ付ける。するとそれで海草は次々と燃えていくのだった。
そして役もだった。左手の中指と人差し指で剣印を作る。それを海草に向けてそのうえで二本の指から火を放って焼きにかかったのである。
それでとりあえず襲い掛かろうとした海草は焼き払った。目先の危機は取り除くことができた。
しかしだった。今の海草を見て二人はそこから先に尋常ではないものも感じていたのだった。
そのうえで。こう言葉を交えさせるのだった。
「何だったと思います？この海草は」
「毒だな」
役はこう本郷に答えた。
「毒の海草だ。まとわりついてそのうえで毒で殺していく」
「そうしたやつですか」
「見てみるのだ」
ここで焼き払ったその海草の屑を指差す。見ればその焼けた屑は不気味な紫色になっていた。あの毒々しい赤からそう変色していたのである。

第三十四章

「この色を見ればな」
「あからさまに怪しいですね」
「そうだ。これは間違いなく毒の色だ」
また言う役だった。
「この紫はな」
「そうですね。それじゃあ」
「これからは切るより焼くことだ」
役はあらためて本郷に告げた。
「わかったな」
「ええ。それでいいきましょう」
確認し合いそのうえでいよいよ中に入る。その中は。
至る場所にその赤い海草が漂っている。それは海中にもだ。そして忽ちのうちに二人を取り囲んできたのであった。
「来た！？」
「それもいきなり」
二人は身構えすぐに火を放つ。しかし今度は量が違った。
次から次にやって来る。焼けども焼けどもだ。まずはそれに危機を覚えた。
「どうします？これ」
「きりがないな」
二人はそれぞれ危惧する声で言ったのだった。
「このままだとな。消耗が過ぎる」
「それが狙いですね」
「その可能性はあるな」
役はそれを否定しなかった。
「どうやらな」
「火でいちいち焼いていたんじゃラチがあかないかも知れませんね」

「それならだ」
それは役も判断した。そしてそのうえで、であった。
右手に持ったままだったその剣を振り回した。そしてそこから凄まじい冷気を繰り出し海面をその場だけ一気に凍らせてしまったのである。
そこには海草もあった。彼は海草ごとその海を凍らせてしまったのである。
「これでいいな」
「また派手にやりましたね」
周囲の殆どの場所を瞬時に凍らせた。これによりその海草を完全に封じてしまったのである。
そしてその正面を火で溶かしながら進む。こうして海草をかわしたのだった。
そのうえで先に進むとだった。目の前に岩山があった。今彼等がいる場所にただひたすら不気味なまでそびえ立っているのであった。

その岩山を見上げて二人は。いよいよ不吉なものを感じた顔で言い合うのだった。
「役さん、こいつだと思いませんか」
「というよりかはこれ以外にはないな」
「ですね。この岩山ですね」
「これだ」
ここにいる、ではなかった。今の言葉は。
「これこそがあの神だ。古に滅んだ筈のな」
「神ですか」
本郷は笑っていた、しかしその顔には極度の緊張がある。汗すらかいている。
「何かわくわくしてきますね」
「楽しみか」
「強い相手と戦うってやつですか？」

彼がここで出したのはこの言葉だった。
「何かそういうのがね」
「そうか。楽しみなのだな」
役は本郷のその言葉を聞いてまずはこう彼に言ったのだった。
「君らしいな」
「俺らしいですか」
「そうだ。君らしい」
また彼に言ってみせた。
「そして君がそう言うと私も安心できる」
「それは何よりで」
「いつものことだがな。それではだ」
「ええ。このデカブツをどうにかすればあいつが出て来るってわけですね」
「それでどうにかするつもりだったが」
役は本郷にとってはいささか意外な言葉を出したのだった。
「どうやらそれには及ばないようだな」
「っていいますと？」
「親切な神だ」
無論本心から言った言葉ではない。多分に皮肉の言葉である。
「自分から出て来てくれるようだ」
「ですか」
「動いたな」
役がこの言葉を出すとだった。その黒い巨大な岩山がゆっくりと動きだした。

第三十五章

そしてそれはすぐに激しい揺れとなり。岩は次第に崩れていった。
「おっと」
「まずはそれか」
二人はそれを見てすぐに後ろに跳び退いた。それで岩による難を避けた。
岩は次々と降り注いで来る。その降り注ぐのが終わった時に。巨大な禍々しい姿がそこにあった。
全身漆黒の鱗であり頭の頂上と手首足首、それに腰や肩の辺りに鰭がある。その鰭は鋭くまるで剣である。
目は異様なまでに大きく丸い。それが魚そのものの顔にある。その剥き出しの巨大な歯は三列である。手足のそれぞれ御本の指には水かきと禍々しい爪がある。優に二十メートルはあった。
「これがですね」
「そうだ。ダゴンだ」
役はここではじめてこの神の名を呼んだ。
「これがだ。古の神ダゴンだ」
「あの異世界から来た神ですね」
「邪神とも呼ばれていた」
役はこのことも話した。
「あの己の眷族を使い地上を己のものにしようとする神だ」
「そうした海の神ですか」
「水を司るクトゥルフ」
役の口からはこの神の名前も出された。
「それと同じ立場でありながら激しく対立する神だ」
「クトゥルフと同じく地上を手に入れようと考えているからですね」
「その通りだ。その神が今蘇って来たか」
「何度も言いますけれど蘇らなくていいんですがね」

またこんなことを言う本郷だった。
「いや、本当に」
「それは私達の都合だ。あちらはそう思ってはいない」
「そういうことですか」
「むしろこの神は復活したくて仕方がなかった」
神の考えを読んでいた。それは考えというよりは本能であるかも知れないが。
「そして今復活した。それだけだ」
「ですか。そしてそれを俺達が」
「倒さなくては私達が倒される」
答えはそれだけだった。
「いいな、そういうことだ」
「そうですね。しかしこいつは」
ダゴンを見上げ続けている。その大きさは途方もないものだった。その大きさを見ただけでもだった。戦意が萎えるものがある。しかし役が今言ったこともまた絶対のものであったのである。そう、倒すしかなかったのだ。
「どうしましょうかね、倒すにしても」
「ここにいては倒すことはできない」
「っていうか来ましたよ」
言っている側からだった。邪神が動いてきた。
その右足で二人を踏み潰そうとする。二人は今度も素早く後ろに跳び退いた。
それまでいた場所に深い足跡が残る。それは優に人が数人潰される程のものだった。
その足跡を見て本郷は。わざと軽い笑みを浮かべて言うのだった。
「あと一歩遅れていたら、ですね」
「終わりだったな」
「ええ、もう確実にね」
それがよくわかる今の邪神の動きだった。

「ここにいたままじゃどうしようもないですけれど」
「しかしこの大きさでは中々攻撃することもできない」
「ですね」
上を見上げる。やはり途方も無い大きさである。顔があまりよく見えない程である。
「このままじゃ、ですね」
「さて、どうするかだが」
役は見上げ続けながら静かに言った。
「ここはな」
「何か策がありますか？」
「策か」
「ええ。何かありますか？」
「ないと言えば嘘になる」
役はまずはこう述べたのだった。
「ないと言えばな」
「それを聞いて安心しましたよ」
本郷は役の今の言葉を聞いてにやりと笑った。それはそのまま彼の本音であった。
「その言葉をね」
「安心してくれれば何よりだ」
「それでどういった策ですか？」
「とはいっても簡単なことだ」
今度は前置きが述べられた。簡単だというのだ。
「至極な」
「簡単なんですか」
「上にあがるだけだ」
それだというのである。
「今我々がいる場所はだ」
「海の中です。そういうことですか」
「その通りだ。陸にいるわけではない」

役はその上を見続けている。そこにはダゴンが相変わらずその異様な巨大そのものの目で彼等を見下ろしている。黒いガラスをそのままそこに入れた様な何の感情も見られないその目で。彼等を見下ろし続けているのだった。

第三十六章

「だからこそだ」
「上にあがって、ですね」
「そうすればわざわざ踏み潰されることもない」
「それに上にあがれば」
本郷も言う。彼は役が言わんとしていることが全てわかっていた。わかっているからこそ言葉を合わせることができていたのである。
「こちらもこの化け物の動きがよく見えますね」
「そしてその弱点を攻めることもな」
「いいこと尽くしってわけですね」
その状況こそまさにそれだというのである。
「そういうことですね」
「わかってくれたならばだ」
「ええ、答えはそれ一つですね」
言うとだった。すぐにその身体を上にあげる本郷だった。まるで宙を舞うようにしてた。
役も同時にそうして動く。そのうえですぐにダゴンの顔の高さにまであがるのだった。
同じ高さで見る邪神の顔はさらに禍々しいものに見えた。漆黒になっている分だけその眷属である深き者達よりもそう見えていた。不思議なことにだ。
「さて、上にあがりましたね」
「これで随分楽にはなったな」
「少なくとも上から一方的に攻められることは絶対になくなりました」
本郷は言う。しかしここで邪神の巨大な腕が横から襲い掛かる。その先にはどす黒い色の鋭い爪がある。二人はその腕と爪をそれぞれ上下に動いてかわした。

その攻撃をかわしたうえで。本郷は軽く役に対して言ってみせた。
「こうして攻撃は仕掛けられますけれどね」
「しかしそのまま底に留まっているよりは遥かにましだな」
「そうですね。ずっと」
「そしてだ」
役は左手に数枚の札を出した。今度出したのは黄色い札である。
それを右から左に邪神に向かって投げる。すると札は忽ちのうちにそれぞれ数本の鋭い小刀になって邪神に襲い掛かるのだった。
それは一直線に魔物に対して襲い掛かる。しかしだった。
小刀達は邪神のその漆黒の額に当たるとあえなく崩れ落ちてしまった。まるで飴が割れる様にあえなく崩れ落ちてしまったのだった。
役はそれを冷静に見て。そのうえで言うのだった。
「生半可な攻撃では倒せないか」
「みたいですね。どうやら」
「しかしだ。攻撃は出せる」
それでもこのことを言うのだった。
「こうしてな」
「攻撃を出せないより出せるってことがですね」
「これだけでもかなり違う」
役の言葉は強かった。そこには攻撃が効かなかった悔しさは何処にもなかった。むしろそれは当然だと受け止めているものがあった。
「やられるだけよりもな」
「その通りですね。じゃあ俺も」
今度は本郷だった。その左手に数個の小さい球を出してきたのだった。
そしてそれをだった。先程の役がそうした様に邪神に対して投げ付ける。するとだった。
「むっ！？」
「何もこれで潰すってことはないですよね」
本郷は不敵な笑みを浮かべて述べたのだった。

「何もね」
「というとだ。その球はか」
「ええ。目くらましですよ」
それだというのである。
「これはね」
「それか、目くらましか」
「はい、それも只の目くらましじゃありませんよ」
彼は楽しげな声で役に話すのだった。
「これはね」
「というとどうしたものだ？その目くらましは」
「普通の目くらましはただ墨とかで見えなくしますよね」
「そうだな」
「これはちょっと違うんですよ」
その楽しげな言葉が続く。
「いえ、ちょっと以上にですかね」
「ではどういうものなのだ？」
「ああいうのですよ」
見るとだった。そこにあったのは墨ではなかった。それは本郷に言う通りである。
そして何かというとである。黒い無数の細長い紙片がそこに舞っていた。それで以って邪神の視界を阻んでいるのだった。
「紙でね」
「紙か」
「暗くなっても見える奴は見えますから」
そうだというのだった。実際に夜行性の動物は夜であってもそこにあるものを見ることができる。彼は既にそれを考えていたというのだ。

第三十七章

「ですから」
「神を使って目くらましをしたのだな」
「そういうことです。さて、これはどうですかね」
本郷はまた不敵な笑みを浮かべて述べたのだった。
「そうおいそれとは俺達を見ることはできませんよ」
「これで邪神の動きはかなり阻害されることになったな」
「そしてです」
さらにであった。本郷はその左手に今度は赤紫の球を数個出したのであった。そしてそれもまた邪神に対して投げる。しかし投げた直後に邪神の無闇に振り回した腕の爪が彼を襲って来たのだった。
しかし彼はそれもかわした。すぐに下に動いてかわしてみせたのである。
「さっきよりかわすのはずっと楽でしたね」
「やはり見えてはいないようだな」
「ですね。おかげでかわすのも楽になりましたよ」
こう言うのである。
「それでさっき投げたのはですね」
「今度は何だ？」
「絵の具ですよ」
それだというのである。
「絵の具をね。使ったんですよ」
「今度の只の絵の具ではないな」
「わかりますか、もう」
「わからない筈がない」
役は今は碌に見えずあがく邪神を見据えながら本郷に答える。二人は今は邪神の間合いからは離れそこから様子も探っていた。
「それはな」

「まあ忍術で使う絵の具ですからね」
「だから余計にか」
「ああ。これは特別でしてね」
笑いながら話す本郷だった。
「あれですよ。血の気が集まっているところに着くんですよ」
「血に反応する絵の具ということだな」
「ええ、そういうことです」
そうだと述べる本郷だった。
「ですから。急所がわかりますよ」
「人間の場所と違っていてもか」
「それでもわかります」
断言だった。言葉には確かな笑みまで含まれていた。
「奴が生きている限り急所ってやつは存在しますからね」
「それこそ機械かそうでない限りはだな」
「ですから。あれを使ったんですよ」
「それでか」
「目くらましをして」
そのことも再び語るのだった。
「それでこれです」
「形成としてはこちらに有利になったと言っていいか」
「少なくとも随分楽にはなった筈ですよ」
ここでも確かな言葉を出す本郷だった。
「間違いなくね」
「そうだな。それではだ」
「やりますか？いえ、やれますか」
「やれるな、確実にな」
役も勝利を見だしていた。本郷の使った二つの球によってだ。
「さて、それではだ」
「決めますか」
本郷がこう役に言ったその時だった。視覚を阻まれ身体中の急所

を赤く染められてしまった邪神は思いも寄らぬことをしてきたのだった。
不意にその鱗達が無数に浮かび上がってきた。そして。
その鱗達が海中を乱れ舞ってきたのだ。その中の何割かは二人にも向かって来た。
「！？鱗が」
「これで斬るつもりか」
役はすぐにこう察したのだった。
「どうやらな」
「そう易々とやられるつもりはないってわけですか」
「仮にも邪神だ」
役は言った。
「それならばこの様にして攻めて来るのも考えられることだ」
「一筋縄ではいかないってことですね」
本郷は早速その鱗を刀で弾き飛ばしながら役に応えたのだった。
その鱗は七十センチはあった。楯程度の大きさがある鋭い刃を持つ漆黒の鱗だった。
弾き飛ばしても刀には凄まじい衝撃が残る。そしてすぐに別の鱗が来たのだった。

第三十八章

本郷は今度は刀で受けることはしなかった。身体を右に動かして素早くかわしてみせたのだった。鱗をすんでのところでかわした。
「そうした方がいい」
「かわした方がですか」
「そうだ。その方がいい」
役もまたその鱗達を自分の身体を上下左右に動かしながら述べたのだった。
「受ければ凄まじい衝撃が走るからだ」
「だからですね」
「それかだ」
役はここで右手に持ったままだったその剣を鱗に対して突き出した。そしてそこから冷気を出して鱗を凍らせて動きを止めてみせたのだった。
本郷はそれを見てだった。その刀に気を入れた。そのうえで刀を横に一閃させて前から来た鱗を一刀両断にしてみせたのであった。
「こうやればいいんですね」
「かわしても鱗はまだ生きている」
「それじゃあきりがないってことですね」
「その通りだ。わかったな」
「ええ、よく」
言いながら再び鱗を一閃する本郷だった。役もまた別の鱗を凍らせていた。
「けれど。このままじゃですね」
「ラチがあかないというのだな」
「そうですよ。ほら、また鱗を出してきましたし」
言っている側からだった。邪神はまた鱗を出してきた。そのうえで二人を切り裂かんとし続けているのだった。まさに刃の嵐だった。

「このままじゃ俺達真っ二つにされるか」
「よくて怪我を受ける」
「怪我を受けたらどちらにしろ終わりですよ」
本郷はこうも言った。
「血が流れたらその匂いで場所がわかりますからね」
「そうだな。匂いでな」
「海にいるやつってのは鼻が利きますからね」
鮫がその代表である。実際に彼等と深き者達との戦いにおいて鮫が出て来て勝負を終わらせている。それを思い出してもわかることだった。
「ですから」
「折角目を封じてもそれで変わらなくなってしまうな」
「その通りですよ。ですから」
「傷を受けないうちに倒すか」
「それでどうします？」
本郷はまた鱗をかわしながら役に対して問うた。
「このままじゃ何時かは」
「倒すしかないな」
ここで役が出した答えはこれであった。
「やはりな」
「あの邪神をですね」
「そうだ、倒す」
役は再び言葉を出した。
「あの邪神を一気にだ」
「そうですか。それしかないですね」
本郷もそれで納得したのだった。
「ここはやっぱり」
「それではいいな」
あらためて本郷に告げた。
「一気に行くとしよう」

「幸いまだ目くらましも効いてますしね」
本郷はまずはそれをよしとしたのだった。
「しかしそれでもですよ」
「鱗か」
「ええ、邪神の周りが一番凄いですよ」
見ればその通りだった。鱗達は邪神の周りにこそ最も舞っていた。
彼を護る為であるのはもう言うまでもないことだった。
「そこに進むってなれば」
「下手をすればすぐにだ」
「真っ二つですね」
本郷はあえて最悪の事態を述べてみせた。
「もうすぐに」
「しかし今行かなければだ」
「今度は写真と鱗の挟みうちですか」
「どうする？」
重く低い声で本郷に問うてきた。
「ここは。どうするべきかだ」
「行きましょう」
答えは先程と同じだった。
「ここは。それしかないですね」
「その通りだな。それではだ」
役の言葉に鋭さが宿った。

第三十九章

「行くか」
「このままですか？」
行く前に一応役に対して尋ねた。
「このままであの嵐の中にですか」
「勿論このままではない」
役はそれは否定したのだった。
「このままではな」
「じゃあどうするんですか？」
「飛び込む」
そうするというのである。
「あの中にな」
「っていうとあいつの懐にですか」
中というのはこの場合はそこであった。邪神の懐という意味である。その中に一気に飛び込むというのである。
「あの嵐を通らずにだ」
「また無茶なことを言いますね」
本郷は今の役の言葉を聞いて思わず苦笑いを浮かべてしまった。
「嵐を通らずにあの中をっていうのは」
「方法はある」
だがそれでもだった。ここでも彼の冷静さは全く変わらない。何一つとしてだ。
「私にな」
「どういう方法ですか？それは」
「これだ」
言いながらだった。不意に懐から何かを出してきたのだった。
それは薬だった。それを一気に二人の周りに撒く。するとだった。
「えっ、この薬は！？」

「身体を一旦原子レベルにまで分解する薬だ」
それだというのである。見れば彼等の姿は完全に雲散霧消してしまっていた。海中の何処にも姿を見せることはない。
「これを使えばだ」
「あの嵐の中も通り抜けられるってことですか」
「そういうことだ」
まさにそれだというのである。
「これでわかったな」
「ええ、これならよく」
「しかしだ」
薬を使ってみせたうえでまた言う役であった。やはり二人の姿は完全に消えてしまっている。
「この薬の効き目は僅かな時間しかない」
「つまりその間にってことですね」
「そういうことだ。いいな」
「ええ、よくわかりました」
話を聞けばだった。もうそれで充分であった。役としてもだ。
「それじゃあ」
「一気に進む」
「はい」
二人はそのまま一気に駆け抜けた。そして邪神の目の前に来たその時にだった。ここでその姿が浮き出て来たのである。まるで煙から出て来る様に。
「ぎりぎりってところですね」
「しかし中に入ることはできた」
「ええ、それは間違いなく」
役の今の言葉に頷く。確かに今二人は鱗の嵐を越えてそのうえで邪神の懐に辿り着いていた。これは否定できない事実である。
「ここにいますからね」
「さて、後はだが」

「今のうちに倒すだけですか」
「急所を攻撃すればいいのだがな」
役は考える目で述べた。
「それだけだがな」
「急所はもうはっきりしてますよ」
本郷がこのことを役に話した。
「それはね。さっきの絵の具で」
「それはわかっている」
「じゃあすぐにでも」
「それはわかっているのだがな」
役の返答は今一つはっきりしないものだった。それが何故かというとだ。
「弱点を衝いてもだ。一つで倒れるだろうか」
「一つでは、ですか」
「これだけの巨体だ」
そのとてつもない巨体は幾ら見ても小さく感じることはなかった。まさに山の如き巨体である。
「一つの急所だけでそういけるかというとだ」
「疑問ってわけですね」
「その通りだ。無理かも知れない」
こう言うのである。

第四十章

「若しかすればな」
「じゃあ二手に分かれますか」
「そうだな。そうしよう」
「それじゃあ俺はまた」
ここで再びであった。あの分身の術を使いまた分け身を五つ出してみせる本郷だった。これで彼はまたしても六人になるのだった。
「この術を使いますね」
「そうしてくれ。私もできる限り動いて攻める」
「御願いしますね。狙う場所はまずは」
「中心だ」
そこだというのである。
「身体の中心を狙っていく。いいな」
「あれですか。チャクラですか」
インドのヨーガで出て来る言葉である。身体の中心に七つ縦に揃っている。ここのそれぞれの力を開放することで己の真の力を発揮するのである。そしてそこは同時に人体の弱点でもあるのだ。
「そこをですね」
「その通りだ。衝く」
役は言った。
「それでいいな」
「そういうことで」
すぐに動いた二人だった。しかしその後ろにあの鱗が来た。それも急にだ。
「気付かれた!?」
「そうかもな」
二人の背から迫るその鱗達を背中越しに見ながら言い合う。
「その可能性は否定できない」

「ちっ、どうします？」
「今更どうこうできるものではない」
役は正面、邪神の身体に顔を戻して本郷に告げた。
「最早な」
「それじゃあこのままですね」
「一気にだ」
最早一刻の猶予もないということだった。
「やるぞ」
「ええ、それじゃあ」
「貫く」
まさに一撃で。
「いいな」
「はい、それぞれの場所につきましたよ」
本郷は分身達と共に六つの急所についていた。そして役は脳天に。弱点の中で最も効果があるとされるそこについたのである。
そしてまさに一気にであった。本郷も分身達も役もその手に持っている刀や剣をその赤く染まっている弱点をついたのだった。するとだった。
手応えがあった。間違いなかった。彼等は邪神の急所を確かに貫いた。
「やった！？」
「手応えはある」
役も本郷に対して告げた。
「間違いなくな」
「それじゃあ」
「下がるぞ」
その余韻に浸る間はなかった。もうすぐそこまで鱗達が迫ってきていたからだ。
分身達はそのまま貫かれ消えていく。鱗は邪神そのものの身体に突き刺さりそこから赤黒い血を出してみせた。しかし二人はそれを

紙一重でかわせたのである。
かわした後に残ったのは邪神の巨体だけだった。彼は動きを止めていた。そうしてゆっくりと後ろから倒れていき海底に着く時に。その姿を消したのであった。
「よし」
「終わりましたね」
役も本郷も邪神の姿が消えたのを見て会心の笑みを浮かべた。その時に本郷の姿も一つになりそのうえで完全に元に戻っていた。
「これでもう」
「そうだな。鱗も消えている」
主が消えればだった。鱗も全て消え去ってしまっていた。後には何も残っていなかった。
いるのは二人だけだった。もう何もすることがなかった。
「それじゃあ役さん」
「帰るとするか」
「ですね。仕事は終わりました」
その会心の笑みで語る本郷だった。
「これでね」
「まずは村に戻るか」
また言う本郷だった。

第四十一章

「それではな」
「ええ。それじゃあ」
「さて、帰ればあの牧師さんが帰っているかな」
「そうですね。そういう時間ですね」
それを聞いて述べた本郷だった。
「いや、朝だとかも言っていたような」
「そうだったか。あまり覚えていないな」
「まあどちらにしろですよ」
本郷はまた言うのだった。
「帰りましょう、二人でね」
「そうだな。何はともあれ仕事は終わった」
これは確かに言えた。彼等はそのことを確かめていた。深き者達も邪神もであった。戦いに残っている者達は誰一人としていなかった。
戦いに残ったのは二人だけである。残った彼等はゆっくりと村に出た。村はいたって静かなものだった。
教会に入るとやはり牧師はいなかった。中は至って静かでがらんとしていた。礼拝堂も食堂もだ。誰もおらず月明かりと闇だけがあった。
その教会の中を歩きながらだった。二人は話した。
「とりあえず風呂を焚きますか」
「そうだな。そして夕食を食べてだ」
「寝ましょう」
こうして身支度を整えて休んだ。朝起きると丁度ここで牧師が帰って来たのであった。
「いやあ、どうも」
「はい、おはようございます」

「おはようございます」
「何も変わりはなかったですか？」
穏やかな顔で二人に問うてきたのだった。
「何も」
「ええ、何も」
「ありませんでした」
当然ながら昨夜の死闘のことは隠すのだった。全てだ。
「それで俺達もですね」
「これで立ち去らせてもらいます」
「そうですか。ではこの村には誰もいなくなりますね」
牧師はここで意外な言葉を口にしたのだった。
「それでは」
「っていいますと」
「牧師さんもですか」
「はい。昨日言われまして」
寂しさと感慨が混ざった顔での言葉だった。
「この村を去って別の教会に赴任して欲しいと」
「ですか」
「後任は」
「いません」
とのことだった。まさに牧師がいなくなれば誰もいなくなるということだった。
「この村からは完全に去るということで決まりました」
「成程」
「計算して手回しをしていたのだな」
二人は牧師の話からこのことを察したのだった。カナダ政府は二人が仕事を成功させるのを見越してそのうえでこの牧師の所属している団体にも話をしていたのである。
だからこそだった。彼等は察したのだった。
「それじゃあこの村は」

「本当に誰もいなくなりますね」
「村の方々には申し訳ないですが」
やはり牧師は村でのことを知らなかった。何一つとしてだ。
「私もこれで」
「それで何時去られますか？」
「何日後に」
「用意が整い次第すぐだそうです」
そうなり次第だというのだった。
「すぐに村を後にして欲しいと」
「それじゃあ俺達も」
「お手伝いします」
それを聞いて申し出たのだった。
「是非共」
「協力させて下さい」
「いえ、それは」
好意を受けるのを申し訳なく思い断ろうとする牧師だった。それは彼の謙虚さから来る言葉だった。それで二人に対して述べたのだった。
「あまりにも」
「何、いいってことですよ」
「もうすることはありませんから」
だからだというのだった。
「ですから御願いします」
「手伝わせて下さい」
「そこまで仰るのなら」
牧師も二人の好意を受けることにしたのだった。好意を強く断るのも失礼と思ったからだ。
こうして仕事を終えた二人はまた別の仕事を受けるのだった。日本に帰る前のささやかな仕事はそれまでの戦いを忘れさせ次の戦いへの英気を養うのに充分なものであった。

深き者　完

2009・10・9

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2377i/

深き者

2010年10月8日12時57分発行